

# ドストエフスキイ『未成年』における 〈благообразие〉について

松 本 賢 一

## 1. 「二十歳の書き手」

『未成年』（1875）を構想するにあたって、Ф.М.ドストエフスキイ（1821－1881）はかつて『罪と罰』（1866）を構想した時と同様の問題を抱えていた<sup>1</sup>。作中の出来事を叙述するのに、主人公自身の口による一人称形式にすべきか、それとも別に語り手を立てて、その語り手の視点による三人称形式の叙述にすべきか、という問題である。

元大学生ラスコーリニコフによる強盗殺人とその発覚（事件の表面だけを見るならば、犯人の自首）の顛末を、当初ドストエフスキイは、ラスコーリニコフ自身の告白（あるいは手記）という形式で叙述しようと企図していた。そのことは『罪と罰』のために用意された夥しい草稿が物語っている<sup>2</sup>。

だが、1865年10月下旬から12月の間に書かれたと推測されている準備資料（2）の次の一節は、ドストエフスキイが同時に自らに途方もない難問をも課したことを示している。

（…）事件の進行を必ず現時点に置いて、曖昧さを無くしてしまうこと。つまり何とかして殺人の全体を解明し、彼の性格と諸関係を明らかにすること。〔欄外に——松本注〕傲慢さ、個性、尊大さ〕その後はもう小説の第2部を始めること。現実との衝突と、自然の法則や義務への論理的な帰結。（…）〈Ⅶ－141～142〉<sup>3</sup>

犯人自身の視点による叙述である以上、「事件の進行」を「現時点に置」

く事に問題は無いだろう。「曖昧さを無くしてしまうこと」も、ある程度までは可能であろう。しかし「殺人の全体を明らかにし、彼の性格と諸関係を明らかにすること」が、犯人であるラスコーリニコフの視点から可能であるとは言い難い。「何とかして」とはいうものの、「傲慢さ」や「尊大さ」を備えたラスコーリニコフの、自身の行為の正当化や自己欺瞞等々を、彼自身の口から、しかし本人にはそれと分からぬように描き出すこと——これは至難の業である。現行の『罪と罰』で5度描かれるラスコーリニコフの夢を、研究者や評家はしばしば精神分析学者じみた手付きで「夢判断」しようとしてきたが、もしも『罪と罰』全篇がラスコーリニコフの言葉で語り尽くされたとしたら、その時はテキストのすべてが「夢判断」の対象になってしまったであろう。

ドストエフスキは際どいところで方針を変えた。構想過程のほぼ最終段階に属するとされる準備資料（3）の最初に、彼はこう書き付けている。

（…）あたかも目に見えず、しかし全知の存在としての作者からの物語。しかし一分たりとも彼から離れることなく、「これはすべて余りにも思いがけず起きたことだった」という言葉が使われるほどである。（…）〈Ⅶ-146〉<sup>4</sup>

「目に見えず、しかし全知の存在としての作者」——即ち神の視点を持つ作者と、主人公から「一分たりとも」「離れることなく」、主人公と共に不意の出来事に驚くことのできるほど主人公に身を添わせている作者との融合は、犯行時のみならず、犯行の前後における主人公ラスコーリニコフの切迫した心理を読者に伝えるのに精妙の効果を発揮した。実際には、作者（語り手）は「一分たりとも」ラスコーリニコフから離れないわけではなく、小説の構成上止むを得ずラスコーリニコフのいない場面を描写したり、一定の時間ラスコーリニコフを行方不明にしたりしている。とはいえそれも、「全知の存在」でありながらラスコーリニコフの五官と同じ五官で外界と接触するというこの語り手の効果を減殺するほどのものではない。

『未成年』の創作ノートは、執筆の時期によって四種類に分類されているが、

これらのノートに目を通せば、ドストエフスキが再び一人称叙述と三人称叙述の間で揺れ動いていたことが分かる。

1874年7月11日（23日）から9月7日（19日）<sup>5</sup>にかけて書き込まれたとされる2番目のノートには、6月12日の日付の後に次のような記述が見える。

(…) 課題の重要な解決

一人称で書くこと。私という語で始めること。

『偉大なる罪人の告白、自分のために』(…) <XVI-47><sup>6</sup>

この後、一人称叙述による書き出しの試し書きのような文が数行続き、再び叙述形式についての注意書きが記される。

(…) なぜ裕福になりたいと思ったか、いつ理念が現れたか、率直に簡潔に始めること。

(中略)

「私は文体抜きで書く」あるいは「私はもちろん文体抜きで書く、ただ自分のために」またはその類で。これは真ん中（小説の？——松本注）でのこと。告白は並外れて簡潔（プーシキンに学ぶこと）。言い尽くさないこと（недосказанность）が沢山。(…) <XVI-47>

「並外れて簡潔」に「ただ自分のために」に書かれた手記に「言い尽くさないことが沢山」あるのは当然の事だと言えるが、果たしてそれが小説として成立するか否かには疑問が残る。少なくとも「曖昧さを無くしてしまうこと」はできない。

同年9月2日。ドストエフスキはまだ迷っている。引用中「未成年」とあるのは、将来の完成稿における主人公にして手記の筆者アルカーゼイ・ドルゴルーキを指している。

(…) 二つの疑問。もしも作者からの叙述にしたら、面白くなるだろうか？ 未成年からの（私からの）叙述なら言うまでも無く面白い。

それにもっと独創的になる。それにもっとよく性格が出る。

私からか作者からか？（私から——もっと独創的。ブルシーロフについてもこの方が良くらいだ<sup>7</sup>）

NB.未成年のもとに物語を置く方が独創的。ひとつの細部から別の細部への移動。このような配置に彼固有の性格がある、が、章ごとにではない。

私から——もっと独創的にもなり、愛情も増す。芸術性も一層求められる。恐ろしく大胆に、より短く、配置がより容易に、そして未成年の主人公としての性格がより明晰になる。そうすれば小説の始まる理由としての理念の意義がより明らかになる。しかし、このような独創性は読者をうんざりさせはしないだろうか？印刷紙35枚の間読者がこの私を辛抱できるだろうか？そして大事なことは、小説の根本的な思想が二十歳の書き手によって自然に、完全に表現され得るだろうか？

（中略）

私からならば、発展させる思想の数を減らさなければならなくなる。未成年は当然のことながらそれらの思想をそれらが語られたとおりに伝えることができず、本質だけを伝えるのだから。

私からの方がより独創的だ。未成年が自らの発達と未熟に応じて、アネクドートや細部にいともナイーブに飛び移ることができる、というまさにそのことによって。そのようなアネクドートや細部は自身の物語を正しく伝える作者には不可能なものである。（…）〈XVI-98〉

『罪と罰』を構想している時のドストエフスキイにとって関心があったのは、主人公ラスコーリニコフの性格だけではなく、彼が犯す殺人と彼との関係をいかに描くかであった。否、むしろラスコーリニコフの性格は彼と彼の犯行との関係において析出されるべきものであった。それゆえにこそドストエフスキイは、主人公の犯行を描くに際して「曖昧さを無くしてしま」うことを必要とし、「全知の存在としての作者」を必要としたのだ。

一方、『未成年』を構想しながらドストエフスキイは、ただ形式の「独創性」

にのみ拘泥しているのではない。二十歳にしかならない青年の「ただ自分のために」書かれた手記という形式が、単なる新奇な設定ではなく、真に独創的なものとなるためには、その叙述スタイルの中に手記の筆者である主人公の「性格」が浮かび上がることが必要だと彼は考えている。物語をそれらしく成立させようとする作者ならば当然払う配慮も、この若者には無縁である<sup>8</sup>。「自らの発達と未熟に応じて」彼は挿話から挿話へ、場面から場面へと身軽に飛び移る。ひとつの挿話で現れる思想は、たとえそれが作者（ドストエフスキイ）にとって重要な意味を持つものであっても、未成年にとって重要でなければ、もはや発展させられることなく忘れ去られる。「作者」と「未成年（私）」では、用いている遠近法が異なっている。いや、事態はむしろ逆であって、「未成年」が自身の叙述で用いる遠近法こそが日常的なものであって、職業的な作家たちの用いている遠近法の方が特殊なのかもしれない。

とはいえ、二十歳の青年がただ自らの思いのままに手記を綴ったからといって、そのような代物が必ず筆者の性格を遺憾なく表現するとは限らない。ましてやその若者の抱いている「理念」の意義まで明らかにできるとは限らない。「二十歳の書き手」の手記がそれだけの負荷に耐えられるものになるためには、そして小説<sup>ロマン</sup>として成立するためには、やはり小説家ドストエフスキイの技倆が要るのである。二十歳の青年が書くからといってただ印象を書き散らすのではなく、そこには「一層の芸術性」が求められる。それは通常の「芸術性」ではなく、日常的な遠近法の中に置かれているからこそ「独創的な」光を放つ「芸術性」である。その「独創性」に読者が随いて来てくれるか否か、という心配は尤ものことであるとしても、やはりドストエフスキイには気懸かりなのである。「小説の根本的な思想が二十歳の書き手によって自然に、完全に表現され得るのだろうか？」と。

1874年9月8日(20日)から12月にかけて書かれたとされる三番目の創作ノートの、10月14日の日付の後に、自らの気を引き締めるように、ドストエフスキイはこう記している。

(…) 小説の進行する間、次の二つの規則を必ず守ること。

第一の規則。『白痴』や『悪霊』における過ちを避けること。つまり、

二次的な事件（沢山ある）が言い尽くされない形で（в виде недосказанном）、仄めかしの形で、そして小説めいた形で描かれ、幾つかの出来事や場面にわたって、長々とした場を取って引き伸ばされ、直截に眞実を説明せずに、ほんの少しの説明もなく、推測や仄めかしの中に置かれているという過ちである。二次的なエピソードであれば、それらは読者の貴重な注意に値しなかったのだし、むしろ逆に、そのせいで主要な目的がぼやけてしまい、解明されなかったと言って良い程である。それは読者が田舎道に迷い込んで広い道を見失い、注意力を混乱させてしまったからに他ならない。

避けるように努めること、二次的な事柄には重要でない場所を割り振って、ずっと短くし、主人公の周辺にのみ出来事を集結させるよう努めること。

第二の規則は、主人公は**未成年**である、という点にある。その他のことはすべて二次的なことだ。彼<sup>9</sup>さえも——二次的なものである。ホエマ<sup>ホエマ</sup>叙事詩は**未成年**に、彼の理念に、あるいはこう言った方が良いだろう、自らの理念の保持者および獲得者としての**未成年**にのみあるのだ。  
(…) <XVI-175>

8月12日のノートで、『未成年』の中に「沢山」あるだろうと予想された「言い尽くさないこと」が、ここに引いた「第一の規則」では避けるべき「過ち」とされている。少なくとも形式的にはほぼ完全な三人称叙述が用いられている『白痴』（1868）と、小説の登場人物の一人を語り手とした『悪霊』（1872）の二篇の中には、最後まで発展させられなかった数多くのモチーフや、作者ドストエフスキから見れば主要なものでない二次的な思想が蒔いている。二次的な事件やエピソードは、読者の注意を逸らしてしまい、彼がその作品によって目指した「主要な目的」をぼやかしてしまった、と彼は考えている。それでは8月12日のノートでドストエフスキが予測した『未成年』における「言い尽くさないこと」は、この反省の上に立って、その量を減らすことになるのか。逆である。職業的な小説家の創作上の配慮から生まれる不自然な語り手とは異なり、職業的でない「二十歳の書き手」、「未成年」は、「自

らの発達と未熟に应じて」、それが主要なエピソードであれ、二次的なエピソードであれ、「いとナイーヴに飛び移る」。「言い尽くされないこと」や発展させられない思想は当然のことながら増すであろう。ただし、『白痴』や『悪霊』の轍を踏まぬようにするためには、作者の意図によってそれらがいかにも意味ありげに仄めかされたり、「長々とした場を取って引き伸ばされ」たりする不自然さは避けなければならない。そのようなことは、「二十歳の書き手」アルカーゲイの関心の赴く結果としてしか起こり得ないのである。「二次的な事柄には重要でない場所を割り振って、ずっと短くし、主人公の周辺にのみ出来事を集結させるよう努めること」というドストエフスキの自戒は、アルカーゲイの手記を自然なものたらしめようという意図に発している。それゆえに、続く「第二の規則」が「未成年」が主人公であることの確認であり、将来のヴェルシーロフである「彼」さえもが「未成年」に付随する「二次的」な人物であることの確認であるということは、単なる登場人物間の役柄の割り振り以上のものを意味している。「未成年」が主人公であることと、彼が手記の筆者であること、彼の口からすべての事件が文学者的な配慮を欠いた形で語られることとは分かち難く結び付いているのである。あるいは、自ら執筆する手記に展開する様々な出来事の中で、「未成年」は主人公というよりも単なる狂言回しのように見えるかもしれない。だが、彼が主人公であるのはそれらの出来事にどれだけ関わっているか、誰に向かって何を言い、何をするかということにのみ拠っているのではない。1年前に自らが経験した出来事や自分の言動を書き止めた手記に浮かび上がる「未成年」の相貌こそが主人公なのだ。

本稿は、小説『未成年』における〈благообразие〉という語の意味内容を探ることを目的としている。後述するように、この名詞は『未成年』においてきわめて特徴的な用いられ方をしているため、従来も評家や研究者の注意を引いてきた。しかしながら、ドストエフスキの読解や研究においてしばしば見られるように、それらは作品の文脈を無視した抽象的な思弁に終わってしまうことが多い。〈благообразие〉という概念が作者ドストエフスキにとって重要なものであったことは以下の論考によって明らかになっていくであろうが、手記の筆者アルカーゲイは「自らの発達と未熟に应じて」この

概念を受け止めながらも、それにがんじがらめになることなく、他の「アネクドートや細部にいともナイーブに飛び移る」。小説『未成年』の主人公にして虚構の筆者が、そのように安定を欠く若者であるということは、作者ドストエフスキの「規則」であるばかりではない。読者にとっての「規則」でもある。「主人公は**未成年**である（…）その他のことはすべて二次的なことだ。彼さえも二次的なものである」——「彼」すなわちアルカーヂイの父ヴェルシーロフを小説の中央に据えて〈благообразие〉という概念を検討することは特に警戒しなければならない。この誤謬を犯した評家に対する批判をも本稿は含んでいる。

## 2. 〈благообразие〉——その通常の意味と 『未成年』における特殊な意味

ロシア語の名詞〈благообразие〉は、形容詞〈благой〉（良い、有益な、喜ばしい<sup>10</sup>）と名詞〈образ〉（様子、姿、容貌、面影）から成っている。従って通常露和辞典では「端正、上品<sup>11</sup>」「端正な容姿<sup>12</sup>」などと訳される。つまり、ある人間の内面とは関わりなく、またその人間の言動に対する他者からの倫理的・道徳的な評価には左右されない、もっぱら外面的な評価を示す語である。

〈благообразие〉という名詞の意味するところについては、ロシアで出版される辞典類でもほぼ同様の説明がなされている。最新のアカデミー版19巻ロシア語辞典では、「快い外見、礼儀にかなった姿」、また「秩序、体裁」と説明され<sup>13</sup>、また少し古いところではウシャコフ版4巻辞典で、形容詞〈благообразный〉（見かけの快い、外見で敬意を起こさせる）に相応する名詞<sup>14</sup>として説明されている。〈благой〉という形容詞が「良い」という意味を含むにせよ、この語が前綴される〈благообразие〉という名詞の意味内容には、特定の道徳的価値判断は含まれていない。

更に遡ってヴラザーミル・ダーリ（1801-1872）の編纂になる『現用大ロシア語詳解辞典』では、〈благой〉の意味として〈добрый〉（善い、善良な、親切な）〈добродетельный〉（徳のある）〈доблестный〉（勇敢な、賞賛すべき）が挙げられているが、〈благообразие〉の語釈としては（同義

語〈благообразность〉の説明としてではあるものの)〈благоличность, красота, пригожество, краса, баса〉(いずれも「美」「優美」「綺麗さ」等を表す名詞——松本注)が挙げられており<sup>15</sup>、やはりそこに一定の道徳的判断は含まれていないといえる。〈благообразие〉は肯定的な価値ではあるが、それは物や人の外形、外面的な特長によってのみ人に感知されるものであり、その限りで〈благообразие〉という語は、その中に含まれる〈образ〉という名詞の意味するところに大きく傾いた意味内容を持っていると言える。

ドストエフスキがこの〈благообразие〉という言葉に、外面的な「端正さ」や「美しさ」以外に、別のすぐれて内面的な、道徳的、宗教的価値を担わせたのが『未成年』においてであった。

『ドストエフスキ語彙辞典』で〈благообразие〉の項を担当執筆したツイブ(Е.А.Цыб)によれば<sup>16</sup>、ドストエフスキによる名詞〈благообразие〉の使用は全部で16例(実際は17例——松本注)<sup>17</sup>に上るといふ。この16(17)例はすべて小説作品中でのもので、驚くべきことに、その内13(14)例は『未成年』における用例である。ツイブはドストエフスキがこの語を使用する時の意味を大きく二つに分類している。そのひとつは〈Приятная внешность, благопристойный вид; порядок, приличие〉(快い外見、礼儀正しい見かけ; 秩序、礼儀(または体裁))であり、これは上記の辞書的な〈благообразие〉解釈と大差の無いものである。だがこの意味で、すなわち一般的な用法で〈благообразие〉という語が使用されているのは16(17)例中たった4例に過ぎない(『貧しき人々』、『死の家の記録』、『悪霊』、『未成年』で各1例ずつ<sup>18</sup>)。一方、すべて『未成年』に見出される残り12(13)例の〈благообразие〉の意味をツイブは簡単に〈Нравственное совершенство〉(道徳的完成)と説明し、文例を並べた上で「注釈」として「この意味での〈благообразие〉という語は『未成年』のみに見られた」と述べている<sup>19</sup>。

語彙辞典という性格上ツイブは〈благообразие〉という名詞、もしくは概念が小説『未成年』の中でどのように用いられ、どのような機能を果たしているかというところまで議論を進めようとはしていない。ツイブの数量的な調査結果が示しているのは、既成の語に新たな意義を付与して、自らの作品の鍵概念にしてしまうというドストエフスキの自身の言語感覚に対する強

い自信だけである。

第1節でも述べたように、『未成年』は、二十歳の青年アルカーゼイ・ドルゴルーキイが、自分が19歳であった時の約8ヶ月の出来事を回想しながら綴った手記という体裁をとった小説である。従って、そこに描かれるのはアルカーゼイ自身の見聞に限られ、登場人物の発話以外の文もアルカーゼイ自身の言葉であることを考慮すれば、小説中で〈благообразие〉という言葉が使われる際には、それは例外なく登場人物の誰かれかアルカーゼイによって発せられているのだということを確認しておかなければならない<sup>20</sup>。

アルカーゼイは地主貴族ヴェルシーロフの私生児である。ヴェルシーロフは自身の領地で家僕を務めていたマカール・イヴァーノヴィッチ・ドルゴルーキイの妻ソーフィヤ（農奴）と通じた。当時すでに50歳を過ぎていたマカールは妻ソーフィヤを主人ヴェルシーロフに譲り、自らは巡礼となってロシア中を放浪し始めた。ヴェルシーロフと譲渡された内縁の妻ソーフィヤとの間に婚外子として生まれたのがアルカーゼイとその妹リーザである。小説は、家族からひき離されて成長したアルカーゼイが、生まれて初めて家族と共に暮らすためにモスクヴァからペテルブルクにやって来ることによって始まる。農奴解放後の急速な社会変化の中で、社会の最小単位である家族までが変質して「偶然の家族」と化し、そこで育つ青年層に道徳的な基盤を与えられなくなっているロシアの現状が、「偶然の家族」の象徴とも言うべきヴェルシーロフの家庭と人生の第一歩を踏み出そうとする私生児アルカーゼイの経験を通じて描き出されていく。

孤独な幼少年時代の中で、アルカーゼイはすでに「ロスチャイルドのような金持ちになる」〈XIII-66〉という「理念」を飼い育てている。この「理念」の根底には、すべての人々から隔絶し、自由に孤独に閉じこもりたいという欲求が横たわっている<sup>21</sup>。「理念」があるにも拘らず、その実現を一時後回しにして彼がペテルブルクに出て来たのには幾つかの目的があったが、そのひとつが、実父である貴族ヴェルシーロフという人物の見極めを付けることであった。まだ10歳であった自分が一度だけ垣間見、憧れ続けた父が自分の憧憬に値しない人物だと分かったならば、自分は「孤独」の中に閉じ籠もろう、そう思い極めてアルカーゼイはヴェルシーロフのもとにやって来たので

あった。従って、小説『未成年』は、というよりもアルカーヂイが書き綴る手記は、「ヴェルシーロフとは何者か」という問いをライトモチーフとして持っている。

一方でアルカーヂイは、三部構成のこの小説の第3部に至って、自らの法律上の父親、もと農奴の老巡礼マカール・イヴァーノヴィッチ・ドルゴルキーに出会う。この時までには彼はセリョージャ公爵によって体現されるロシア名門貴族の道徳的腐敗、これもまた名門の貴族である実父ヴェルシーロフを捉えているシニズムと分裂を見て来ている。思い掛けなくも初めて出会った法律上の父マカールから、アルカーヂイは「衝撃的な印象」〈XVI-176〉<sup>22</sup>を受ける。アルカーヂイの人生の指針は、自らの内に意識せざるを得ない「蜘蛛の魂」〈XIII-307〉<sup>23</sup>との葛藤を伴いながらも、貴族である実父からもと農奴の戸籍上の父へと、大きく振れていく。そしてふたりの父の間にあるアルカーヂイが、マカールから受ける「衝撃的な印象」を象徴的に表すものとして口にしたのが〈благообразие〉という言葉であった。従ってこの言葉の使用は、ただ一例を除いて第3部以降に、すなわちアルカーヂイのマカールとの邂逅以降に限定されているのである。

第2部の最後で、妹のリーザが、自分が親友づきあいをしているセリョージャ公爵の子供を宿していること、それゆえ自分が父ヴェルシーロフの金だと思ってセリョージャ公爵から借りていた金が、実は妹に対する公爵の行為の賠償金のような意味合いを持っていたことを知って衝撃を受けたアルカーヂイは、その後もひそかに恋い慕うカチェリーナ・アフマーコヴァの目の前で彼女の婚約者ビョーリングに突き飛ばされたり、賭博場で泥棒扱いされて放り出されたり、次から次へと屈辱的な目に遭い、厳寒のペテルブルグの路上で凍死しそうになる。寄宿学校時代の同窓生ランベルトに救われるものの、陰謀家のランベルトの家に身を寄せていることに不安を感じたアルカーヂイは、脱出して母親の家に帰り、9日間の人事不省に陥る。第3部はこのアルカーヂイの回復期から始まり、彼がマカール老人と初めて会うのは「意識を取り戻してから4日目」〈XIII-283〉のことであった。

病室を抜け出したアルカーヂイは、これまでは人の口を通してしか知らなかった自らの法律上の父の姿を母の部屋に見出してこう述べている。

(…)そこに座っていたのは、目の覚めるほど白い髪とたつぷりとした恐ろしく白い顎鬚をたくわえた老人で、もうだいぶ前からそこに座っているのは明らかだった。彼は寝台ではなく、ママの床几に腰を下ろして、寝台には背中できかかっているだけだった。といっても彼は身体をまっすぐにしていたので、明らかに病んでいたとはいえ、支えなどは全く必要ないだろうと思われたほどである。彼はシャツの上に毛皮外套を引き回し、膝はママの肩掛けで覆われ、足にはスリッパを履いていた。どうやら背は高いらしく、肩幅も広く、幾分蒼褪めて痩せてはいたけれど、病気とはいえ矍鑠とした様子で、顔は細長く、ふさふさとした、だが余り長くない髪をして、年は70を越えていると見えた。(…)彼は僕を見ても身じろぎすることもなくじっと、ものも言わずに僕を見ていた。僕も同じように彼を見ていたのだが、僕の方は比べようのないほどの驚きをもって見ていたのに対して、彼の方は少しも驚いていなかったというところに違いがあった。それどころか、この無言の5秒か10秒の間に僕という人間をすっかり隅々まで見極めたかのように、彼は不意にこりと微笑み、静かに、聞こえないほどの声で笑い始めたくらいである。笑い声はすぐに止んだが、その晴れやかで朗らかな痕跡は彼の顔に、特にその眼に残った。それはとても青く、光をたたえた大きな眼であったが、瞼は年のせいであれ下がり、脹らんでいたし、周囲に無数の細かい皺があった。彼のこの笑いが何よりも僕に効いたのである。(…) <XIII-284~285>

この後アルカーヂイは「笑い」についての「くぐぐぐしい長広舌」を「物語の流れを犠牲にして」<XIII-286>差し挟むのであるが、これについては後述する。

初めて出会った法律上の息子にマカール老人は「神の神秘」や「科学」、そして次の章で更に発展させられる「落ち着きの無い」人々<XIII-289>について語るが、これに対するアルカーヂイの反応はマカールの話への完全な理解や同意を示すものではない。世代も、育った環境も異なる戸籍上の親子

の間で初めて取り交わされる会話であれば、それも当然のことではあるが、何よりもこの時のマカールとアルカーヂイは熱に浮かされていた。そしてその熱に浮かされた状態でアルカーヂイは、「不意に彼の手を取り、彼の方に屈み込んでその手を握り締めながら、興奮した囁き声で、心で泣きながら」〈XIII-290〉言うのである。

(…) 僕、あなたに会えて嬉しいです。もしかしたら、僕あなたのことをずっと待っていたのかも知れません。僕は彼らの誰一人として好きじゃないんです。彼らには〈благообразие〉が無いんですから...僕は彼らには随って行きません、どこへ行くことになるのか知りませんが、でも僕はあなたと一緒にいきます... (…)  
〈XIII-291〉

アルカーヂイのこの発作的な感情の爆発は、母が部屋に入ってきたことによって中断される。アルカーヂイのこの言葉をマカール老人がどう受け止めたかも、この小説がアルカーヂイの手記という体裁をとっている以上、一切書かれていない。ただ、自室に戻ったアルカーヂイは、ベッドの中でこの初めての法律上の父親との出会いを反芻する。そしてマカール老人との出会いの前には忌々しく思っていた、壁に映る夕日のきらきらと明るい斑点を見て、「魂が躍りだし、心に新しい光が差し込んだかのようなようであった」と述べ、「僕はこの甘やかな瞬間を覚えているし、忘れたくないと思っている。ほんの一瞬だけにせよそれは新しい希望と新しい力だったのだ...」〈XIII-291〉と付け加えている。

更にアルカーヂイは、手記を記している「今」の時点からこの時の事を振り返って、自分の病的な状態が然らしめたものかも知れないが、しかし「他ならぬあの明るい希望を僕は今でも信じている——これこそ僕が今書き付けて思い出しておきたいと思ったことなのだ」〈XIII-291〉と書いている。それに続けて、彼は自分がうわ言であれ、〈благообразие〉という言葉の口にしたことをその時確認したことをも記録している。

(…) もちろん僕はその時でもはっきりと知っていた。自分がマカー

ル・イヴァーノヴィッチと一緒に放浪の途につくことなどないということ、自分を捉えた新たな志向が一体何なのかは自分でも分からないということ、それでも、うわ言にであれ、「彼らには<благообразие>が無い」という一語をもう発したのだということ。——僕は夢中になって考えていた。「もちろん僕はこの瞬間から<благообразие>を探し求めるんだ。でも彼らにはそれがないから、だから僕は彼らを置いていくんだ」と。<XIII-291>

「彼らには<благообразие>が無い」というアルカーゼイの突然の言葉が、「神の神秘」や「科学」、「落ち着きの無い」人々についての僅かな対話によって引き出されたものであるとは到底考えられない。先述したように、アルカーゼイはこの時マカール老人の言葉や思想に圧倒されたわけではないからである。とはいえ、忌々しかった夕日の斑点が、マカールとの出会いによってアルカーゼイにとって全く逆の意味を持つようになったことは、明らかに彼の精神に訪れた何らかの回心を物語っている。そしてこの回心はアルカーゼイがこれまで周囲の人々に認められなかった<благообразие>をマカールに見出したことによっている。手記を綴りながらアルカーゼイが正直に書き留めているように、「ほんの一瞬だけ」のものにせよ、それは「新しい希望と新しい力」へと彼を方向付ける魂の転回であった。そして「うわ言にであれ」<благообразие>という言葉を使ったことを、その時の自分がはっきりと意識していたのだということをおぼろげに書き付けなければならなかったほどに、その衝撃は強烈なものであった。

しかしながら、アルカーゼイは自分が用いた<благообразие>という言葉をやさしく説明できず、また説明しようともしない。彼は小説家ではなく、「二十歳の書き手」に過ぎないのだということをもう一度想起しなければならない。マカールが彼に与えた「衝撃的な印象」を<благообразие>という言葉で表現したというだけで彼には十分なのである。ここではマカールとの出会いがアルカーゼイに人生の新たな指針を指し示したということと、実父ヴェルシーロフを含めた周囲の人間に欠けているのが<благообразие>という語で表現される美質であるということをはっきりと自覚したのだということを確認

認しておく。

二十歳のアルカーゲイが19歳の自分に降りかかった出来事や、自分の言動を、現在の回想を交えながら記述していくという『未成年』の構造は、必然的に、出来事の全体像や、主人公アルカーゲイの経験に対する客観的な視座を欠くという結果を伴う。このことは、本来ならば、アルカーゲイの記述が常に事実に合致するわけではないという事態さえ招来しかねない。そもそも自らの経験を反芻し、記録するというそのプロセスが、事実を歪曲する可能性を秘めてもいるからである<sup>24</sup>。しかしながらドストエフスキは、そのような不安定な要素をテキスト内に持ち込む危険を冒してこの形式を選び取ったのであった。

それにも拘らず、彼は小説の最後に、アルカーゲイの手記を読んだニコライ・セミョーノヴィッチ（モスクヴァ時代のアルカーゲイの養育者）の感想を置いて作品の絵解きとした。二十歳の青年の限られた見聞という形式から解放されたかのように、ドストエフスキはこのニコライ・セミョーノヴィッチに仮託して、農奴解放に代表される「大改革」後のロシアにおける諸々の秩序崩壊、特に家庭の崩壊と青年層を脅かす精神的な危機についての私見を存分に語っている。〈благообразие〉の渴望がアルカーゲイの手記における極めて重要な契機であったことは、このニコライ・セミョーノヴィッチの感想の中にも読み取ることができる。言うまでもなく、このことは作者であるドストエフスキが、主人公アルカーゲイの〈благообразие〉への回心を小説の眼目に据えていたことをも物語っている。

(…) さよう、私は、あなたのことを、あなたの孤立した青年時代のことを心配するのは実際当然のことであったのだというアンドレイ・ペトロヴィッチ（ヴェルシーロフのこと——松本注）のご意見に賛成です。それにあなたのような青年は少なくなく、彼らの能力は常に悪い方に発達するという脅威にさらされています。あるいはモルチャーリン<sup>25</sup>風の阿諛追従か、あるいは無秩序への秘められた希望かに変わっていくのです。しかしこの無秩序への希望は——それも実にしばしば——もしかしたら秩序と〈благообразие〉（あなたの言葉を

使えば)への秘められた渴望から生じるのではないのでしょうか?青年時代が清らかであるのはそれが青年時代だからです。あるいはこういった、かくも時期尚早の狂気の暴発にこそ、かかる秩序の渴望、真理の探求があるのであって、そのような理解も出来ぬほど愚かしく滑稽な物事にこの真理や秩序を見てとり、信じることできた者が現代の若者の中にいるからといって、それが誰の罪だというのでしょうか! (…)<XIII-453>

『未成年』執筆当時のドストエフスキイの、青年層に対する深い同情と期待の滲み出た一節であるが、ここでは<благообразие>という語が「秩序」という語と同列に置かれている。だが、本稿の最初に見たように、「秩序」はそもそも<благообразие>という語の意味を構成する要素のひとつであると共に、人格を規定するための言葉ではない。ニコライ・セミョーノヴィッチが、というよりもドストエフスキイが、孤独な青年層の魂の奥底には秩序と<благообразие>への秘められた渴望があり、それが現代ロシアでは無秩序への希望として現れてしまうのだ、と作品の意図を絵解きしてくれたとしても、主人公アルカーヂイが作品中で出会う新たな人生の指針としての<благообразие>の内実はやはり曖昧なままである。ドストエフスキイの代弁者のような位置にあるとはいえ、ニコライ・セミョーノヴィッチもまた『未成年』の登場人物の一人であり、アルカーヂイの手記の最初の読者であるに過ぎない。アルカーヂイが説明しない限り、アルカーヂイの求める<благообразие>の内実を明らかにすることは彼には不可能であり、彼は自身の社会的位置や年齢、知力に応じて<благообразие>を「秩序」と並立させるしかないのである。

### 3. <благообразие>の変容

アルカーヂイの言葉としての<благообразие>をニコライ・セミョーノヴィッチが(ニコライ・セミョーノヴィッチさえ)理解できないという事情は、この語に着目して『未成年』という小説を読む時に浮かび上がる奇妙な構造を再確認させてくれる。その構造とは、マカール老人から「衝撃的な印

象」を受けたアルカーヂイが「うわ言」のように口にした〈благообразие〉という言葉が、他者によって（ニコライ・セミヨーノヴィッチもその一人である）用いられることによって変容を被り、その変容を被った〈благообразие〉を改めてアルカーヂイが耳にするというものである。その「他者」の代表格がアルカーヂイの実父ヴェルシーロフであるが、ヴェルシーロフによる〈благообразие〉という語の使用を検討する前に、法律上の父マカールによる〈благообразие〉の剽窃を見ておきたい。彼こそはアルカーヂイが〈благообразие〉という語を初めて口にした時のいわばインスピレーションの源であったが、アルカーヂイからこの言葉を聞いたマカールは、それを「盗む」のである。

マカールとの最初の対面を果たした翌日、ヴェルシーロフにソーフィヤ、妹のリーザと何くれとなく一家の面倒を見てくれるタチヤーナ・パーヴロヴナ、更にマカールを診ている医者もいるところで、アルカーヂイは、今度はマカール老人の口から〈благообразие〉という言葉を書くことになる。それは、アルカーヂイが部屋に入るまで続けられていた「学のある」「教授たち」〈XIII-301〉についてのおしゃべりが発展して、「不信心者」（безбожник<sup>26</sup>）とは何か、ということをお説くマカール老人の談話の中でのことであった。マカールによれば、彼は「不信心者には一度として出会ったことが」なく、出会ったといえは「落ち着きの無い」（суетливый）人ばかりであった。このような落ち着きの無い人の中には「大した人もいればちっぽけな人もおり、愚か者もおれば学のある人も」いるが、いつも「気苦労」（суета）が絶えない。たとえばある人々は一生本を読んであれこれ考えてはみるが、「自分自身は相も変わらず訳が分からぬままで、何も解決することができない」、またある者は「書物の中から良いところだけ選び取る、それも自分の考えに合うところをな。それでいて自分自身は落ち着きが無く、自分でまず決めるということができない」〈XIII-302〉のだという。

（…）それからこうも申しておきましょう。（落ち着きの無い人間は——松本注）〈благообразие〉を持っておりません。欲しいとさえ思っておりません。みな破滅してしまって、ただひとりひとりが自分の破

滅を自慢しているのですよ。それでいてただひとつの真理の方に向かおうとは考えもしないのです。だが神様なしで生きるということは——ただもう苦しみでしかありません。自分たちを照らしてくれているものを悪しざまに言って、ご当人はそのことをご存じないのです。だがそれではどうしようもない。人間は何かを拝まずに生きることはできません。このような人間は、いやどんな人間とて持ち堪えられるものではございません。神様を斥けて、偶像を拝むのです——木やら金やら、頭の中でこしらえた偶像を。偶像崇拜者、それだけのことであって不信心者ではない、とまあこんな具合にああいう手合いのことは言わねばなりません。それから不信心者もない筈はないでしょう？本物の不信心者といった人もおりますよ。ただそれは、そういった手合いよりもうんと恐ろしいのです、なぜなら神様のみ名を口に上せてやって来るのですから。何度となく耳にしたことはございますが、出会ったことは全くございません。でもそういう人たちはおりますし、居るに違いないとわしは思いますよ。(…) <XIII-302>

ここで確認しておかなければならないのは、アルカーヂイが<благообразие>という言葉を用いることができたのは、マカールのこのような談話を聞いた結果ではないということである。「落ち着きの無い人」や「偶像崇拜者」は<благообразие>を持たず、持ちたいとも思っていない、というマカールの意見が仮にこの時点でアルカーヂイの胸に落ちたととしても、そしてそれが正しい意見だとしても<sup>27</sup>、アルカーヂイが「彼らには<благообразие>が無い」と口走ったのは、マカールのこの談話を耳にする前日のことである。

更にここではマカールの口調にも注意しなければならない。「落ち着きの無い」人々についてのマカールの説明は、上の引用の直前でひとまず終わっている。一通り話し終わったところで、マカールは「それからこうも申しておきましょう (И еще скажу)」と付け足すように語を継ぎ、そのような人々は「<благообразие>を持たない」と話し続けるのである。言うまでもなく、マカールがこの言葉を前から知っており、「落ち着きの無い人々」を話題に

するときには常にこの言葉を使っていたという可能性もある。しかし彼は前日に、初めて会った法律上の息子アルカーゼイの口から、うわ言のようにこの言葉を聞いているのであり、それが耳の底に残っていてつい口を衝いて出たとも、また、その場に居合わせたアルカーゼイに聞かせるために、とって付けたようにこの言葉を使ったとも考えられるのである<sup>28</sup>。

だが、奇妙なことに、アルカーゼイはマカールによるこの言葉の剽窃に気付かない。それどころか、前日に〈благообразие〉という語を口にしたのが自分ではなく、マカールであったかのような錯覚を起こしている。「落ち着きの無い人々」についての談話が終わった後、椅子の位置を変えるために立ち上がったマカールが滑って床に転倒するというハプニングがあり、その騒ぎが終息したところで、不意にアルカーゼイは立ち上がってこう言うのである。

(…)[マカール・イヴァーノヴィッチ、あなたは又しても〈благообразие〉という言葉を使われましたが、僕はちょうど昨日からずっとこの言葉に苦しんできたんです… いや一生ずっと苦しんできたんですが、ただ前は何のことで苦しんでいるか分からなかったんです。この言葉の一致を僕は運命的なものと考えます、ほとんど奇蹟的なものと… 僕、このこと皆さんのいらっしゃるところで言明しておきます…](…)<XIII-305>

マカール老人が小説の中で〈благообразие〉という言葉を使用するのは先に引いた「落ち着きの無い人々」についての談話が最初である。それは同時に、手記の筆者であるアルカーゼイの目の前で彼がこの語を口にするのが最初だということでもある。それにも拘らず、「あなたは又しても〈благообразие〉という言葉を使われました」と言うアルカーゼイは明らかに混乱している。前日〈благообразие〉という言葉を使ったのはアルカーゼイの方であり、マカールではない。しかもその自分が言い出した言葉に「ちょうど昨日からずっと」いや、「一生ずっと苦しんできた」というのは時間の倒錯以外の何物でもない。そのような矛盾がそのままの形で投げ出されているのが「二十歳の書き手」による手記なのである。とはいえ、前日、マ

カールとの最初の対面の後、ベッドの中でその印象を反芻し、自分が〈благообразие〉という言葉を口にしたことを確認したアルカーヂイが、同じ時に、自分が「一生ずっと苦しんできた」のは〈благообразие〉を求めていたからだと気付いた、より正確に言えば、そのような考えに飛び付いたのではないかという推測ならば可能であろう。そうだとすればこの反芻は、家族から離れた孤独な幼少年期を送ったアルカーヂイが、「孤独」や「自由」を最終目的とする「ロスチャイルドのような金持ちになる」という「理念」を育んだ寄宿舎の「毛布の下」〈XIII-164〉での数え切れぬ夜々を、自分ではそれと気付かぬままに、〈благообразие〉という徳性への憧憬に悩まされた夜々であったと見直す作業をも含んでいたのではなかったか。もともとアルカーヂイは、憧れ続けた実父ヴェルシーロフが、家族が、そしてヴェルシーロフも属する貴族社会の人々が共に生きるべき人々ではないと分かった時には、彼らのもとを去って「理念」の中に閉じ籠もるつもりであった。その「理念」もまた〈благообразие〉の「新しい光」の下で検証を受けたのではなかったか。それゆえにこそ彼は自らの錯誤による「言葉の一致」を「運命的なもの」と、「ほとんど奇蹟的なもの」と思いなし、〈благообразие〉を持たない「皆さん」の前で言明するのである。「僕はあなたの方のもとから去っていきます。それは前からそうするつもりではあったのですが、今はその理由がはっきり分かりました。僕はこれまでもずっと〈благообразие〉を探してきたのですが、それがあなた方には無いと分かったからです」と。

先に引いた言葉のすぐ後で、アルカーヂイは声を高めて言う。それは、少なくともこの時点の興奮したアルカーヂイにとっては、〈благообразие〉を持たぬ人々への訣別の言葉であった。

(…)  
 「皆さん、僕からすれば」僕はますます声を高めた。「僕からすれば、この赤ん坊のそばに（僕はマカールを指差した）あなた方みんなを見ることは——醜悪（безобразие）です。ここには一人だけ神聖な人がいます——それはママです、でも彼女は…」（…）〈XIII-305〉

しかしながら、この言葉の後ですぐに熱病が再発したのを見ても分かるように、これからは〈благообразие〉を求めて生きていこうというアルカーヂイの決意は、浮かされたような興奮の内に為されたものであった。19歳の未成年の心はこの後も激しく揺れ動く。現に熱病の中で彼が見る夢は、ランベルトと共にカチェリーナ・アフマーコヴァ公爵未亡人を恐喝し、彼女を我が物にしたいという彼の隠された情欲と、自分は〈благообразие〉を求めてもっと高潔な生き方をするのだという思いの入り混じった「呪わしい夢」〈XIII-306〉であった。3日間の病の床から離れて、再び行動に移る自分のことを書き始めるにあたって、アルカーヂイは架空の読者に向けてこう語りかけている。

(…) 僕の精神状況についてはまだ今のところはっきり書かないでおこう。それがどういうものであったかをたとえ読者が知ったとしても、きっと信じてはくれないだろう。後からすべてを事実によって明らかにしたほうが良い。だが当面のこととしてひとつだけ言っておこう。読者が蜘蛛の魂を覚えておいてくれるように。それも〈благообразие〉のために彼らから、世間全体から去っていかうとしていた人間にしてこのことがあるのだ！〈благообразие〉の渴望は最高度に達していたし、それはもちろんそうあるべきなのだが、そのような渴望がどうやって他の、口には出せぬような様々な渴望と結び付くことができたのか——それが僕には神秘であった。(…) 〈XIII-307、圈点部分は原文でイタリック〉

アルカーヂイによって、「〈благообразие〉が無い」というに等しい宣告を受けたヴェルシーロフは、それと同時に、孤独な幼少年時代を送らせてきた息子が〈благообразие〉を求めているのだということを知った。彼は彼なりにこの言葉をおのれの中に取り込み、やはりアルカーヂイと同じように自分の人生を検証しようとする。だが注意しなければならないのは、ヴェルシーロフもまた、マカール老人と同様に、アルカーヂイが発する〈благообразие〉という言葉に誘われるようにしてこの語を用いるようにな

るということである。終始謎めかして描かれるヴェルシーロフの形象に目眩まされ、「主人公は**未成年**」であること、「その他のことはすべて」「**彼**（ヴェルシーロフ——松本注）さえも二次的なもの」であるということをおぼえて、ヴェルシーロフの人物像を測るのに＜благообразие＞という物差しを用いる愚は避けなければならない。

たとえば、Д.С.メレジュコフスキイは、1901～1902年に刊行された『Л.トルストイとドストエフスキイ』<sup>29</sup>の中でヴェルシーロフのことを「すでに人生経験の円熟に達した、初老のスタヴローギン」<sup>30</sup>であると評し、ヴェルシーロフがスタヴローギン同様の、そして作者ドストエフスキイ同様の分裂を抱えた形象であると指摘する。それゆえヴェルシーロフもスタヴローギン同様の「強さ」を持ち、アルカーダイの母ソーフィヤをキリスト教的な愛、憐憫の愛によって愛することができ、キリスト教的思想を持つことができるが、一方で「蜘蛛の魂」をも持つことができる、すなわち彼は「二つの感情」を同時に持つことができる、としてメレジュコフスキイは次のように書くのである。

（…）この（ヴェルシーロフの——松本注）キリスト教的な「＜благообразие＞の渴望」に並んで、**未成年**の言葉によれば、全く「別の、口には出せぬような様々な渴望」がある。憐憫の愛と並んで憎悪の愛情が、「蜘蛛の淫蕩」がある。（…）<sup>31</sup>

スタヴローギンとヴェルシーロフの類似点を論ずるメレジュコフスキイの論旨に大きな狂いは無いものの、ここでメレジュコフスキイは重要な、そしてあるいは、自らの論旨を守るための意図的な誤謬を犯している。短絡的に＜благообразие＞に「キリスト教的な」という形容詞を付す粗雑さはともかく、ここでメレジュコフスキイが切れぎれに引用している「**未成年の言葉**」とは、先に引用したように、マカール老人に＜благообразие＞を見出し、それを人生の指針とすると決めた後のアルカーダイが、それでもなおアフマーコヴァ公爵未亡人に対する情熱を忘れることができず、自らの「蜘蛛の魂」を満足させようという企みを捨てていなかったことを正直に告白した一節だ

からである。

あるいはメレジュコフスキはこう言うかも知れない。血のつながった親子であるヴェルシーロフとアルカーヂイは共に〈благообразие〉を求めており、一方で内面の分裂をも共有しているのだ、従ってアルカーヂイの自己分析の言葉をもってヴェルシーロフの性格分析とすることも可能なのだ、と。あるいはそうかも知れない。現に、後でも引くように、ヴェルシーロフはアルカーヂイに向かって、自分もかつては〈благообразие〉を求めていたと言うに等しい告白をしている。しかしながら、〈благообразие〉の渴望と「蜘蛛の魂」の共存はまず第一に主人公アルカーヂイのものであり、そのような分裂をヴェルシーロフもまた抱えているとしても、それは「二十歳の書き手」アルカーヂイの目にそう映ったのだということを忘れてはならない。メレジュコフスキの書き方には、『未成年』においてより重要なモチーフであるはずのアルカーヂイにおける〈благообразие〉の渴望をヴェルシーロフの〈благообразие〉渴望の陰に覆い隠してしまうのではないかという疑問、〈благообразие〉という語の特殊性に引きずられて、文脈を無視した引用を行なうことに無理はないのか、という疑問が残る。そもそもアルカーヂイにとっての〈благообразие〉とヴェルシーロフにとっての〈благообразие〉が同じものであるかどうかの検証すらもここではなされていない。「主人公は**未成年**」であり、ヴェルシーロフさえも「二次的」であるというドストエフスキの「規則」に徹すれば、このような取り違えは不可能なのである。

すでにマカール老人が死んでから、アルカーヂイとの対話の中でヴェルシーロフは次のように言っている。作品中ヴェルシーロフが〈благообразие〉という言葉を使うのはここだけである。

(…)「いいかい、お前、私はもう前から知っているのだが、わが国には幼い頃から自分の父親や環境の醜悪さ(неблагообразие)によって辱められ、自分の家族のことを考え込むようになる子供たちがいるのだよ。私はまだ学校にいた頃からこういう考え込む子供たちに気付いて、その頃は彼らが余りにも早い時期から羨望を覚えるせいだと結

論したものだよ。とはいえ、この私自身も考え込む子供の一人だったのだがね、しかし… すまないね、お前、私は恐ろしくほんやりとしているよ。私が言いたかったのはね、ただ、私がお前のことをここでほとんど絶えることなく危ぶんでいた、ということだけなのだよ。私はいつもお前のことをあの幼い、しかし自分の才能を自覚し、孤立しようとする存在のひとりとして思い描いていたのだよ。私もね、お前同様、一度として仲間を愛したことがなかったよ。自分の力と空想だけを頼りに取り残され、激しい、余りにも早い、そしてほとんど復讐的な〈благообразие〉の渴望、——そうまさしく「復讐的な」渴望を抱くこれらの存在は不幸だよ。だが沢山だ。私はまた本題から外れてしまった。(…) <XIII-373>

ヴェルシーロフはすでに小説の第1部第6章でアルカーダイ自身の口から孤児のような幼年時代を過ごさなければならなかった恨み言を聞いている。それゆえ〈благообразие〉を求めて「一生ずっと苦しんできた」というアルカーダイの言葉は、自らの家僕の妻ソーフィヤとの内縁関係の間にアルカーダイをもうけ、19歳になるまで放置してきた自分への告発と受け止めてもおかしくはない。「私がお前のことをここでほとんど絶えることなく危ぶんでいた」で始まる後半部分は、そのようなヴェルシーロフの親としての思い遣りをも滲ませている。だが問題は、そのような思い遣りを込めながらも、〈благообразие〉への渴望という問題を彼が一般化しようとしていることである。貴族として育った自分と貴族と農奴の間に生まれた私生児アルカーダイとを隔てる垣根、自分の世代とロシア社会の大変革のさ中に人間形成を行なわねばならなかった世代とを隔てる垣根は、ヴェルシーロフのこの発言では掻き消えている。自分が「父や環境の醜悪さ(неблагообразие)によって辱められ、自分の家族のことを考え込む」ようになる子供たちの一人であったという述懐、また「お前同様、一度として仲間を愛したことがなかった」という告白には、〈благообразие〉への渴望という一点をもって、見失われていた自分とアルカーダイとの親子の絆に代えようとする希望さえ窺えるのである。1875年1月から11月にかけて書かれたとされる創作ノート、すなわ

ち『未成年』執筆とほぼ並行して書かれた創作ノートの終わりの方には、〈благообразие〉という言葉を含む、ヴェルシーロフのアルカーヂイへの語りかけの異文が収録されている。

(…) ねえお前、もしも私がロシアの作家で才能も持っているとなれば、きっと主人公をロシアの代々続いた貴族から取ったろうね。なぜならロシアの人間ではこのタイプにのみ、そう、秩序とは言わぬまでもせめて美しい秩序の外形や、私とお前の二人ともが探し求めているあの〈благообразие〉が可能なのだからね。(…) 私がこんなことを言うのは私がヴェルシーロフで自身が貴族だからではないし、12世紀のスーズダリの公から出ているからでも、自分が貴族であることを気に入っているからでもない。この上流階級の根幹には、疑いも無く、何か揺ぎ無い、議論の余地も無いものが定着しているからなのだよ。ここには名誉と義務のすでに出来上がった形式があるからなのだ、これはルーシでは一番珍しいことだよ。(…) <XVI-414~415>

貴族階級の中に「出来上がった」「名誉と義務」の形式、「美しい秩序の外形」が、アルカーヂイがマカール老人との出会いによって自らの人生の指針にしようとした〈благообразие〉と同列のものでないことは言うまでもない<sup>32</sup>。だがそれよりもここで重要なのは、完成稿には残らなかったものの、アルカーヂイがこれから求めようとしている〈благообразие〉を、ヴェルシーロフが「私とお前の二人ともが求めている」ものだとしてその性格を変えてしまうというモチーフがドストエフスキの頭にあったということであり、それゆえに自身と息子アルカーヂイとの精神的な同質性を強調する、完成稿でのヴェルシーロフの言葉もまた「〈благообразие〉の渴望」を息子と共有したいという思いの現れであったということなのである。

#### 4. 『未成年』におけるトルストイの影響

K.B.モチューリスキイは小説におけるアルカーヂイの役割を過小評価している。特に〈благообразие〉が問題となる第3部以降では「青年は自分の周

囿に起こる事件の旋風に捕らえられ、父の悲劇に引きずり込まれている。彼は主人公から証人へと、記録者へと変わっていく」<sup>33</sup>とまで書く彼は、本稿の第1節で述べた『未成年』の形式の独創性を十分には把握していない。しかし〈благообразие〉がアルカーダイによって見出された概念であることを軽視する点を除けば、モチューリスキイはこの言葉について、たとえば先のメレジュコフスキイよりもかなり正確な扱いをしている。それだけではなく、彼の指摘は、アルカーダイがマカールとの出会いから受けた衝撃がなぜ〈благообразие〉という言葉に収斂していったのかを解き明かすヒントをも含んでいる。

モチューリスキイは、『Ф.М.ドストエフスキイ——その生涯と作品』の特に『未成年』に充てられた章の最後で、〈благообразие〉という言葉で表現される徳性が、小説の時空間の中ではあくまでもまずマカール老人に発するものであることを正確に記述している。

(…)「ヨーロッパ的啓蒙者」ヴェルシーロフに対するアンチテーゼとして作者によって描かれているのが、マカール・イヴァーノヴィッチ・ドルゴルーキイである。この小説の宗教的、芸術的な意図は、彼にその完成を見出している。彼こそは、上流階級によって失われ、また未成年がそのためにかくも苦しんでいる精神的な〈благообразие〉の現れなのである。(…)<sup>34</sup>

また同じ章でモチューリスキイは、人はいかにして生涯の最後を迎えねばならないかについてのマカールの言葉を引きつつ、〈благообразие〉に自分なりの解釈を示している。

(…)死についてマカールは莊重にこう述べる。「年寄りは見事に世を去らねばなりません。(…)知恵の花が盛りを迎えているうちに、幸福に、華やかに死なねばなりません。生涯に満足し、最後の息を吐き、麦の穂が藁束に入るが如く、この世を去るのを喜びながら、おのれの神秘を全うしつつ。(…)同じことですよ、死んだ後でも愛はあ

るのですから！」マカールのこの凝った言い回しの話し方だけでなく、彼の外貌、動き、振る舞いにおいても強調されているのは、〈благообразие〉、壮麗（благолепие）、高度の荘重さ（высокая торжественность）である。民衆の宗教的理想とは魂の美しさである。われわれが知るごとく、ドストエフスキの確信するところでは、社会を動かすのは美的原理なのである。（…）<sup>35</sup>

〈благообразие〉と並列される〈благолепие〉（壮麗）や〈торжественность〉（荘重）も人間の「道徳的完成」に直接関る概念であるとは言えない。だが、正教徒であり、正教への造詣も深いモチューリスキイが、これらの特質がマカールの言葉だけでなく、その「外貌、動き、振る舞い」にも現れていると指摘し、民衆の宗教的理想が「魂の美しさ」にあると説く時、アルカーヂイの探し求めることになる理想が、〈благообразие〉という本来は外面的な美を示す言葉で表現された理由の一端は仄見えるように思われる。〈благообразие〉という語にドストエフスキが付与したもうひとつの意味を、前出のツイブは簡単に「道徳的完成」としか説明しなかったが、この道徳的完成は外形の美と切り離すことのできないものようである。

しかしながら、この興味深く重要な示唆には後で立ち戻ることとして、ここでもうひとつ、モチューリスキイが〈благообразие〉に関して行っている重要な指摘を見ておくことにしたい。モチューリスキイが意図したかどうかはともかく、この指摘は、ヴェルシーロフが〈благообразие〉という言葉を用いるのは息子アルカーヂイが用いるからであり、ヴェルシーロフが口にする時の〈благообразие〉はアルカーヂイが口にする時とは異なった陰影を帯びていることを示しているからである。

「『未成年』はトルストイの『戦争と平和』に対する芸術的な回答である」<sup>36</sup>とした上で、モチューリスキイは、『未成年』の手書き草稿の中から、完成稿には入らなかったヴェルシーロフのアルカーヂイに向けた言葉を引用しつつ<sup>37</sup>、次のように述べる。

（…）皮肉交じりの熱狂を込めてヴェルシーロフが感嘆するトルス

トイの登場人物たちの〈благообразиe〉は驚くほど脆いものであった。それはひと世代も経てば『未成年』の登場人物たちの醜悪(безобразиe)に変化したのである。ヴェルシーロフは息子に言う。「私にはね、お前、お気に入りのロシア人作家が、小説家がひとりいるのだよ。だが私にすれば彼は貴族階級の、いくなれば自らをもってわが国の歴史の「教育的時代」を完成させつつあるわが国の文化的階層の歴史記録者といってもいいのだ。この作家の中で何よりも私の気に入っているのが、ほら、お前が彼の描く登場人物たちの中に求めている〈благообразиe〉なのだよ。彼はある貴族をその幼年時代や青年時代から取り上げ、家庭におけるその貴族を、人生における彼の最初の時期を、最初の喜びや涙を描いているのだが、それが常に確固としていて議論の余地のないものなのだよ。この作家は貴族精神の心理学者なのだ。だが大事なのは議論の余地の無いものとして描かれているということであり、もちろんそれだけでもう同意してしまうということなのだ。同意もし、羨んでもいるのさ。ああ、どれだけ羨まれていることか！いや、これは主人公などというものではないのだ。愛らしい子供たちなのさ。彼らには感じの良い父親がいて、クラブで食事をしたりモスクヴァで大盤振る舞いをやったりしている。上の子供たちは驃騎兵になっていたり、ばね付きの四輪馬車を持っている連中だけの大学で学生をしている。(…) いずれにせよ、そういったことすべてが良いにせよ悪いにせよ、そこにあるのはすでに**盛りを過ぎて固定された形式**であり、出来上がっているのは様々な規則、独特の名誉であり義務なのだよ。」

貴族の形式が持つ〈благообразиe〉に対するヴェルシーロフのこの大袈裟な歓喜が暴露するのは、この形式の不自然さと脆弱さなのである。(…)<sup>38</sup>

「トルストイ(1828-1910)の『戦争と平和』(1865-1869)に対する芸術的な回答であるというモチュースキイの前置きにも拘らず、また『未成年』の創作ノートにしばしば『戦争と平和』の登場人物の名が見えるにも拘らず、

ここでヴェルシーロフは同じトルストイの自伝三部作（『幼年時代』（1852）、『少年時代』（1854）、『青年時代』（1857））をも念頭に置いてと思われる<sup>39</sup>。「彼はある貴族をその幼年時代や青年時代から取り上げ」というヴェルシーロフの言葉が何よりも端的にそのことを物語っているが、『未成年』の目的でもある「人生における最初の時期」、「最初の喜びや涙」を、しかも『未成年』と同じく手記の形で描いているのが他ならぬこの三部作だからである。言うまでもなく、トルストイの自伝三部作における主人公ニコライ・イルチェーニエフとアルカーヂイとは、その属する階層も、育った環境も全く異なっている。しかしここで注目しなければならないのは、トルストイの自伝三部作の主人公イルチェーニエフが属している世代（従ってトルストイ自身の世代）は、この話をアルカーヂイに聞かせている貴族ヴェルシーロフの世代でもあるということである<sup>40</sup>。だとすれば、「貴族の形式が持つ〈благообразие〉に対する」ヴェルシーロフの歓喜とは、たとえそれが皮肉交じりのものであるにせよ、過ぎ去った自分たちの世代、今は醜悪なものとしたが、「議論の余地の無い」、貴族社会の「固定された形式」に対する苦い讃仰に他ならない。無論、ヴェルシーロフはセリョージャ若公爵のように階層としての貴族階級に無批判でいることはできない。かつて幼年時代から青年時代にかけて〈благообразие〉だと思い込んでいたものが、実は「醜悪」でしかなかったことは、モチューリスキイの指摘を俟つまでも無く、ヴェルシーロフ自身がよく知っているのである<sup>41</sup>。

モチューリスキイが引用しているこの手書き草稿は、もう一つ興味深い事柄を示している。完成稿では読み取れないものの、アルカーヂイがトルストイの作品の中に、「彼の描く登場人物たちの中に」、〈благообразие〉を求めていたという事実の示唆である。最終的には完成稿から除かれたこの異文だけを理由に、アルカーヂイがトルストイの作品を読んでいたかどうか拘泥する必要は無いかも知れない。しかしながら、小説第1部の終わりでヴェルシーロフに対する不信感を一時的に払拭されたアルカーヂイが、第2部の冒頭から、「理念」の実現を先送りにして、貴族社会の生活にすっかり馴染み、特別に仕立てた服に身を包み、専従の御者を雇って馬車を乗り回したり高級レストランで食事をしたりしていたことを考えれば、ヴェルシーロフのいう

貴族社会の「固定された形式」を<благообразиe>と取り違える可能性がアルカーヂイにもあったと考えても無理は無いであろう。そして先に述べたように、ヴェルシーロフがここで語っているトルストイ作品が『戦争と平和』に限定されず、自伝三部作をも含んでいると仮定するならば、アルカーヂイがそれらの作品に求めていた<благообразиe>についてはより具体的なものを想定することも可能である。

ここで想起されるのが、自伝三部作の最後の作品『青年時代』において、トルストイが作品の主人公であり手記の筆者でもあるニコレンカ・イルチューニエフをして「私の人生における、教育と社会によって私に植え付けられた、最も有害で偽りに満ちた概念のひとつであった」<sup>42</sup>と言わしめた概念<comme il faut>である。字義通りには「それらしく、しかるべく」という程度のことを意味するこのフランス語は、『青年時代』に先立つ『少年時代』からニコレンカによって上流階級の人間が備えるべき「上品さ」の指標として用いられ始め、『青年時代』では何度か言及されるばかりでなく《Comme il faut》と名付けられた1章さえ設けられている。まもなく17歳になろうとしている『青年時代』のニコレンカは、『未成年』の中に描かれるアルカーヂイよりも3歳ほど年少になるが、「理念」のために大学への進学を断念したアルカーヂイと、大学入学から始まる『青年時代』のニコレンカの間には、精神的な成長の上でそれほどの開きはないといえよう。この時点でニコレンカは自己の周囲の人間を<comme il faut>であるか否かによって区別する習慣を身に付けている。たとえば大学入学のためのラテン語の口答試験を受ける際に、自分の試験勉強の不足を延々と詰る教授について、ニコレンカは次のように書いている。

(…) 下手なロシア語でなされるこの説教の間ずっと、下に向けた彼の眼を私はぼんやりと見ていた。最初の内私を苦しめたのは、三番になれないという絶望であったが、その後それは試験に完全に落第するのではないかという恐怖になり、ついには不公平、侮辱された自尊心、不当な屈辱を意識する気持ちが加わった。その上に、私の概念では、この教授が<comme il faut>の人間ではない——彼の短く、頑

丈な、丸い爪を見て私は発見したのだ——という軽蔑がますます私の中でそれらの感情を焚き付け、毒々しいものにしていったのである。  
(…)<sup>43</sup>

また、期末試験を前にして、これまであまり付き合いのなかった友人たちと共に集まって試験勉強をすることになった際、自分の不勉強を指摘された時のことをニコレンカはこう書いている。

(…) 私は自分の無知が恥ずかしくなった。それと共に、ズーヒンの指摘が実に当を得たものであると感じたので、聞くのをやめてこの新しい友人たちの観察にかかることにした。人間を〈comme il faut〉と〈comme il faut〉でないのに分ける分類に従えば、彼らは明らかに二つ目の分類に属しており、それゆえに私の内に軽蔑のみならずある種の個人的な憎悪をも呼び覚ました。そのような憎悪を私が彼らに覚えるのも、〈comme il faut〉でもないのに私のことをまるで同等と見なしているか、優しく私のことを庇護さえしているかのようだったからである。(…)<sup>44</sup>

このように、17歳のニコレンカ・イルチェーニエフにおける〈comme il faut〉は、彼が劣等感に苛まれる時に自らの優越を意識するための一種の精神的な避難所のような役割を果たしてもいるが、このことは作者トルストイ自身の筆によっても仮借なく暴き出されているのだといえる。そしてそのような呵責のなさは、『Comme il faut』という章題を持った第31章において最も力を発揮している。この章でニコレンカは、16～17歳の頃の自分が囚われていた、〈comme il faut〉であるか否かによる人間の分類がいかにか空虚なものであったかを反省し、自ら批判している。ニコレンカは人間をまず〈comme il faut〉（品の良い人間）と〈comme il ne faut pas〉（品の良くない人間）に分類し、第二のグループに属する人々を更に単に〈comme il faut〉でない人々と民衆（народ）に分けている。彼が尊敬し、自分と同等に見なすのは〈comme il faut〉である人々だけであり、第二の種類の人々のことは

「軽蔑しているような振りをして、しかし本当のところは、人格が侮辱されたような感情を彼らに抱いていたので、憎んで」おり、第三の種類、すなわち民衆に至っては「自分にとって存在していなかった——完全に軽蔑していた」<sup>45</sup>という。だがニコレンカがこのように人間を分類する指標としての〈comme il faut〉とは、実のところ、上手にフランス語を話す能力、磨き立てた長く清潔な爪、お辞儀の仕方や舞踏、会話の才能、そして「万事に対する冷淡さとある種の優美な、人を見下したような倦怠感を絶えず表している」<sup>46</sup>等々といった、貴族階級特有の生活上の些事からのみ成っている。トルストイ自身の分身とも言えるニコレンカは、このような物差しで人間を測っていた自分を批判的に回想し、その主要な害悪は「〈comme il faut〉とは社会における独立した地位であり、人は〈comme il faut〉である限り、官吏にも、馬車作りの職人にも兵隊にも、学者にもなろうと努める必要はないのだという確信にある」<sup>47</sup>と述べている。

『戦争と平和』だけに限らず、『未成年』執筆当時のドストエフスキイがトルストイの自伝三部作をも意識していたとすれば、『青年時代』において作者によって仮借なく、暴露的に描かれる主人公ニコレンカの特権的な〈comme il faut〉への熱中もまた彼の視野に入っていたと考えてよからう。そうだとすれば、個々の人間の内面的な徳性とは関りのない、全く外形的なこの「上品さ」の指標に対置するものとして、人間の姿(образ)に滲み出る徳性を表す概念としてドストエフスキイによって選び取られたのが〈благообразие〉であったと考えることも可能である。そしてその際ドストエフスキイは、マカール老人との邂逅によって衝撃を受けたアルカーデイが口にする〈благообразие〉という言葉を、ニコレンカと同世代の、しかしすでに「青年」ではない貴族ヴェルシーロフという分光器に掛けて見せ、その息子アルカーデイが一度は足を踏み入れかけた人間の形の美しさについての誤った理解——〈благообразие〉と〈comme il faut〉との混同——の危険性をも示したのではなかったか。

トルストイの自伝三部作と『未成年』との関りについて、たとえばГ.М.フリードレンゲルは、モチューリスキイ同様に手書き草稿からヴェルシーロフの言葉を引用し、「ここに引いた言葉には、1850-70年代のトルストイに

とって主たる描写の対象であった「上流」(…)階級の生活を性格付ける一連の特徴が巧みに捉えられている」とした上で、「しかしトルストイによって描かれる家族もまた、「上流階級」に属しているにも拘らず、やはり「偶然の」ものであるか、あるいはいずれにせよドストエフスキの登場人物たちがあれほどの力を持って引き寄せられていた内的な〈благообразие〉には遠いものであった」と指摘する。彼によれば、トルストイの『幼年時代』もまた、その構想の初期においては貴族家庭における「婚外子」の物語であり、そのモチーフを作者が取り去った後も主人公が成長する家庭には「より深く、内的な〈благообразие〉が描かれることなく終わった」からである<sup>48</sup>。前述したように、ヴェルシーロフは貴族社会における〈благообразие〉の欠如を自覚しているが、フリードレンヂェルのこの指摘に倣えば、この自覚は『幼年時代』の作者トルストイのものでもあり、それは、虚構を取り混ぜながらも自らの幼年時代を批判的に回顧するというトルストイの視点によって看取り得る。トルストイのこの批判的な視点は、『幼年時代』から続く二作『少年時代』、『青年時代』へと進むに従ってその厳しさを強めていく。フリードレンヂェルは言う。

(…)これに続く三部作の残り二篇——『少年時代』と『青年時代』——においては家庭の精神的乱脈に対する観察に、世界の複雑さに対する主人公の意識が付け加わる。これまでそのことに気付かなかったにせよ、この世界で隣り合わせに暮らしているのは、日々の糧を考える必要もない地主の子女たちと家庭教師の娘であり、「裕福な」人々と「貧しい」人々であり、他の人間とははっきりと絶縁された特殊な上流のグループに属する〈comme il faut〉の人々ともうひとつの、特権を持たない人々、物腰を良くしたり「良い教育」を受けたりするための学校は出なかったものの、人生に対するより健全で率直な見方を持ち、人生の困難を恐れないことに慣れた人々である。(…) <sup>49</sup>

しかしながら、『少年時代』、『青年時代』と進むに従って主人公ニコライ・イルチェーニエフが「世界の複雑さ」を意識していくとしても、この貴族の

子弟の成長物語が『未成年』の物語と一線を画すのは、主人公の経験や感情、行動が多くの時間を経た上で、言い換えればこれらの作品を執筆している24-27歳のトルストイの批判的な視点から描かれているという点である。第1節でも述べたように、『未成年』は「二十歳の書き手」アルカーヂイが、ほんの数ヶ月前の自分の経験を書き綴った手記である。自分について書く、という作業が必然的に伴う自己の客観化や反省を完全に免れることは不可能であるにしても、「自らの発達と未熟にに応じて、アネクドートや細部にいとまナイーヴに飛び移る」アルカーヂイの手記と、すでに成人した作家トルストイの反省的な意見が混じるニコレーンカの手記とでは、共に一人称叙述の形式が採用されてはいても、その性格が異なっている。特に＜comme il faut＞に熱中した自己への容赦ない批判は同時に作者トルストイの貴族社会に対する強烈な違和感の表明であり、作家ではない二十歳のアルカーヂイに同様のことを求めることは出来ない。だが、トルストイの自伝三部作、就中ドストエフスキイを刺激したと思われる＜comme il faut＞の概念が批判的に取り扱われる『青年時代』と『未成年』とのこの差異こそが、19歳の自分の姿を作者らしい配慮を捨てて自分のために綴る「二十歳の書き手」を登場させたドストエフスキイの真の意図ではなかったか。本稿の第2節で引用したニコライ・セミョーノヴィッチの感想の中に「青年時代（юность）が清らかであるのはそれが青年時代（юность）だからです」という言葉があったことを想起しなければならない。真に現代ロシアの若者を描くためには、トルストイが『青年時代（Юность）』で行なったように既に一定の思想傾向を持った大人の目線で作品を構成するのではなく、主人公である若者の目線で書かなければならない、たとえそうすることによって作品が一見取り留めの無いものになったとしても、その取り留めの無さの中にこそ「未成年」の相貌は浮かび上がるのだから——モチュールスキイの言葉をもじって言えば、小説『未成年』は、トルストイの『青年時代』に対する芸術的答へでもあるのかも知れない。

## 5. <благообразие>と笑い

以上見てきたように、<благообразие>という言葉は、あるいはマカール

老人によってキリスト教的なニュアンスを加えられ、あるいはヴェルシーロフによって過ぎ去った特権的な貴族階級の生活形式であるかのように歪曲され、『未成年』という小説の中で、ある意味では豊穡な多義性を付与されていく。しかしながらこの作品の主人公が「未成年」アルカーヂイであり、〈благообразие〉という言葉が最初に発したのも彼であったということをおぼえてはならない。〈благообразие〉という語が多義性を帯びていくとしても、それは作者ドストエフスキの企みであって、手記の筆者アルカーヂイの企みではない。マカールやヴェルシーロフがどう捉えようとも、アルカーヂイにはアルカーヂイの、〈благообразие〉という言葉を使わなければならなかった事情、この言葉に込めようとした意味があった筈である。「主人公は未成年」であり、「その他のことはすべて二次的なことだ」という「規則」を踏み外さないためには、この点を明らかにしないままで済ませることはできない。

先にモチューリスキイの指摘に見たように、マカール老人に体现される〈благообразие〉が、その「話し方」だけでなく、「外貌、動き、振る舞い」にも看取し得るものだという事は、アルカーヂイが最初の彼との邂逅においてほんの短時間の会話のすぐ後で〈благообразие〉という言葉で「うわ言」のように発したことによっても察することができる。彼はマカールの「言葉」や「思想」にではなく、その外見の何かに打たれたのである。その「何か」とは果たして何であろうか。

この最初の出会いの翌日、今度はマカールの方が〈благообразие〉という語を用い、アルカーヂイがこれを奇妙な混乱をもって受け留め、再び熱病のために床に就かなければならなかった事情についてはすでに本稿の第3節において述べた通りである。この熱病から回復した後アルカーヂイは、家族と共に数日にわたってマカールの傍に身を置くことになるが、その間の経験を述べる中で、この巡礼の老人から受けた印象をまとめた言葉で書き留めている箇所がある。

(…) このことも打ち明けておこう（打ち明けても自分を貶めることにはならないと思う）。僕はこの民衆出の存在（マカールのこと

——松本注)に、ある種の感情やものの見方について僕にとっては新奇で未知なあるもの、以前僕自身がそれらの感情やものの見方を理解していたよりも遥かに晴れやかで慰めになるあるものを見出していた。それでもなお、彼が実に不屈きともいえる穏やかさと揺ぎ無さで信じているある種の頑固な偏見には、時に思わずかっとなることがないではなかった。だがそれはもちろんただ彼の無教養のせいだった。彼の魂はといえば、実に見事に形作られていて、それまで僕は他の人々にはこの手のものでより優れたものに出会ったことがなかったくらいである。(…) <XIII-308>

「感情やものの見方」においてこれまで自分の知らなかった「晴れやかで慰めになる」ものをマカールに見出したというアルカーヂイの告白は、本稿の第3節でも検討した、彼を訪れた魂の回心とも関りのあることだともいえようが、重要なのはアルカーヂイが、「無教養」のゆえにマカールが頑なに信じている偏見には決して譲歩をせず、ただマカールの魂のあり方に注目しているという点である。小説の第3部第3章にはマカールの話した様々な見聞や宗教的な見解が並べられているが、そこに見られるのはマカールからアルカーヂイへの見解や思想めいたものの一方的な伝授ではない。巡礼のマカールが宗教的な人物であるからといって、アルカーヂイがその宗教性に染まるといった体の交流——『カラマーゾフの兄弟』におけるゾシマ長老とアリョーシャ・カラマーゾフの交流のような——ではないということは銘記しておかなければならない。

またアルカーヂイは、マカールの性格と<благообразие>という概念について次のような感想も書き留めている。

(…)彼の中で何よりも魅力的だったのは、もうすでに述べたように、彼の度外れの純心さと、自尊心の全く無い点であった。ほとんど無垢といってもいい心が感じ取られた。心の「快活さ」があった、だから<благообразие>もあるのだ。「快活さ」という言葉が彼はとても好きでちよくちよく使った。実を言えば、彼には時々病的とも言うべ

きある熱中が、極端な感動が訪れることがあった。それは実のところ、幾分は熱病がずっと止むことがなかったせいもあるのだろう。しかしだからといって〈благообразие〉の妨げとなるものではなかった。  
(…) <13-309>

自らが書き手である手記の中で、〈благообразие〉という言葉が最初に発したのが自分であるにもかかわらず、アルカーヂイは〈благообразие〉という概念についてほとんど説明をしようとしない。それゆえにこそ、先述したようなヴェルシーロフによるこの概念の曲解も生じるのだが、〈благообразие〉という言葉についての解説めいたことをアルカーヂイが書くのは唯一この部分のみである。ここでは〈благообразие〉を生み出すものとして「心の「快活さ」(веселие)」が挙げられている。後でもみるように、この「快活さ」という特徴は〈благообразие〉という概念を理解する上で極めて重要なものであるが、しかしながら「心の」快活さが道徳的な完成と外面の美しさにどうつながって行くのかはこの断章からはやはり判然としない。〈благообразие〉という言葉がある種の人間の徳性を表すものであるとしても、これまで見てきたようにこの言葉は同時に姿(образ)の美しさをも示すものであり、貴族社会の外面的な形式や〈comme il faut〉と混同される危険はまさにその点に生ずるのであった。加えて、アルカーヂイ自身が、マカール老人が「快活さ」という言葉を好み、「ちよくちよく」使っていたと書いていることにも注意しなければならない。〈благообразие〉が心の「快活さ」の結果現れる特質だというアルカーヂイの意見に真理が含まれているとしても、アルカーヂイがこのように書くのは、死を目前にしたマカールの談話に耳を傾けていた結果であるかも知れず、マカールと初めて出会い、しばらく言葉を交わしただけのアルカーヂイがなぜ不意に〈благообразие〉という言葉を使ったかの説明にはならない。この疑問に対する答えは、やはりアルカーヂイが最初にマカールに会ったその場面に求めなければならない。

本稿の第2節でも見たように、アルカーヂイは初めて会った法律上の父、マカール老人の外貌をかなり詳細に記している。それは70歳を過ぎ、長年の放浪を経て死期を迎えつつあるとは言うものの、かつての妻の寝台に倚りか

からず、身体をまっすぐに伸ばした矍鑠とした老人の姿であった。だがいかに矍鑠とした姿をしていても、そのことが直ちに〈благообразие〉という言葉葉を誘発するとは考えられない。仮にマカールの姿が「端正」という印象を人に与えるものであったとしても、それは〈благообразие〉という語が通常の文脈で使われる時の特性に過ぎず、ドストエフスキイが『未成年』においてこの語に与えようとした「道徳的完成」と美との融合は、この静かに座っている老人の姿そのものには見出すことができない。だが、この対面の場面で、マカールは確かに〈благообразие〉という言葉アルカーヂイに思い付かせるだけのあるものを与えたのである。第2節で引いた、アルカーヂイが受けた印象の最後の部分をもう一度引用する。

(…) 彼は僕を見ても身じろぎすることもなくじっと、ものも言わずに僕を見ていた。僕も同じように彼を見ていたのだが、僕の方は比べようのないほどの驚きをもって見ていたのに対して、彼の方は少しも驚いていなかったというところに違いがあった。それどころか、この無言の5秒か10秒の間に僕という人間をすっかり隅々まで見極めたかのように、彼は不意ににこりと微笑み、静かに、聞こえないほどの声で笑い始めたくらいである。笑い声はすぐに止んだが、その晴れやかで朗らかな痕跡は彼の顔に、特にその眼に残った。それはとても青く、光をたたえた大きな眼であったが、瞼は年のせいで垂れ下がり、脹らんでいたし、周囲に無数の細かい皺があった。彼のこの笑いが何よりも僕に効いたのである。〈XIII-284~285〉

「僕という人間をすっかり隅々まで見極めた」かのようなマカール老人の静かな笑い、止んだ後も「晴れやかで朗らかな痕跡」を目や顔に残す笑い——これこそが最初の会見においてマカールが法律上の息子アルカーヂイに贈った具体的で眼に見ることのできる〈благообразие〉であった。「彼のこの笑い(смех)が何よりも僕に効いた(подействовал)のである」という言葉以外に、この奇妙な父子対面の場で、マカールが自分に与えた衝撃を語るアルカーヂイの言葉は他に無い。そしてまさにこの言葉の後で、アルカーヂイ

イは「笑い」についての独自の考察を開陳する。言うまでもなくこの考察は、彼がマカールの笑いを見たその瞬間に頭に浮かんだものではなく、この場面から後の彼の経験から生まれたものだともいえよう。しかしながら、「彼のこの笑いが何よりも僕に効いたのである」という言葉の直後に置かれているというその事実は、アルカーヂイのこの「笑い」についての考察が、この時のマカールの笑いを出発点としていたことを示している。またこの考察を述べた後でアルカーヂイは、「物語の流れを犠牲にしてまで、笑いについてのこのくくだしい長広舌を僕がここに書くのは考えあつてのことだ。なぜなら僕はそれを僕の人生から得た最も大事な結論のひとつと思うからだ」〈XIII-286〉と書いている。彼は意識的にこの考察をここに挟み込んでいるのである。

アルカーヂイ自身が「くくだしい長広舌」と表現する、彼の「笑い」についての考察は、かいつまんで紹介すれば次のようなものである。

人間の笑いには実によく何か下卑たもの、笑っている人間を貶めるものが現れるが、笑っている本人は自分が与えている印象について何も知らない。それは人が眠っている時に自分がどんな顔をしているかを知らないのと同じである。賢い人でも眠っている時の顔は愚かしいということがあるのだから。

実に多くの人々が、「ちゃんと笑う」ということができない。笑うということは天賦の才であつて、作つて得られるものではない。「作つて得られるとすればそれはただ自分を再教育し、良い方に開発し、自分の性格の中の悪い本能に打ち克つことによつてのみである。」

本当の笑いとは何よりもまず誠実さ(искренность)を必要とするものだが、そもそも世間の人々には誠実さが無い。また笑いは無邪気さ(беззлобие)をも必要とするものだが、世間の人々は邪気のある笑い方をするものである。「誠実で無邪気な笑い——それは快活さ(веселие)であるが、現代の人々のどこに快活さがあるというのか、そもそも彼らは快活に振舞うことが出来るのだろうか？人間の快活さ——これは何よりもその人を余すところなく表す特徴である。」「最も高く、最も幸福な発達を遂げた時のみ人間は打ち解けて、というのはつまり人を惹き付けるように温厚に、快活に振舞うことができるのだ。ぼくは人間の知的発達のことを言っているのではなく、性格のことを、

人間の全体のことを言っているのだ。」それゆえ、ある人間の魂を知りたいと思ったら、彼が笑っている時に観察する方がいい。「良い笑い方を人がするなら、つまりそれは良い人間なのだ。」それに対して、笑いの中にほんのちよっぴりでも愚かしさの徴が見えたら、たとえその人間がどんな思想を口にしていても、その人間は愚かなのである。また、「笑いがもしも打ち解けたものであったとしても、それでもなぜか下卑たところがあるように思えたら、その人間の本性が下卑ていると思ってい。そしてその人間の中に以前は認めていた高潔で高尚なものはすべて思うところあつての見せ掛けか、無意識の内にとどこかから借りてきたものであつて、彼は後々きつと悪い方へと変わっていき、「有利なこと」に従事するようになり、高潔な理想の数々は若い日の迷いや熱中として惜し気もなく擲ってしまうのだ。」〈XIII-285～286〉

ここでアルカーヂイが主に述べているのは作り笑いや人に見せたり聞かせたりするための笑いについてではないことに注意しなければならない。そのような笑いのみに関する考察ならば、それは一種の処世術に過ぎない。アルカーヂイは「笑い」というものを人の内面を映す鏡のように考えている。「ちゃんとした笑い」を笑うことのできない人間は、その内面にも何らかの欠落があるのだ。正しい「笑い」とは「誠実で無邪気な」笑いであり、マカールが好んで口にした「快活さ」の現われとしての笑いである。「天賦の才」とは言うものの、この「笑い」にせよ「快活さ」にせよ、「自分を再教育し、良い方に開発し、自分の性格の中の悪い本能に打ち克つこと」によって「最も高く、最も幸福な発達を遂げ」るならば可能だ、とアルカーヂイが述べていることに注意しなければならない。自らを道徳的に高めていくことによって、真の快活さに裏打ちされた誠実で無邪気な「笑い」に到達することは人生の目的として定めるに足る、と言っているのとこれはほぼ同断である。

アルカーヂイはそこまで踏み込んで述べてはいないが、初めて出会ったマカール老人が見せた「笑い」の中に、彼は「誠実」さと「無邪気」さ、そして真の「快活さ」を直観的に見て取った。それは天賦のものであるか、そうでなければ自己を高めようとする不断の努力によってのみ得られる美質である。そしてそれら内面の美質が、「笑い」という可視的な外形において看取

されたからこそ、アルカーヂイは外面的な美をも表す〈благообразие〉という言葉で表現したのだ。「誠実」にせよ、「無邪気」にせよ、そして「快活さ」にせよ現代の人々が持ち合わせていない性質であるというアルカーヂイの意見が、「彼らには〈благообразие〉が無い」という彼の発言と呼応していることは言うまでもない。マカール老人との出会いでアルカーヂイが受ける「強烈な衝撃」とは、彼がこれまで見たことのなかったマカールの「笑い」であった。その「笑い」が他の人々の笑いとはどう異なっているかをその場では説明できなかったために、アルカーヂイは〈благообразие〉という言葉を用い、マカールへの傾倒を告白した。だが、恐らく後になって、これからは〈благообразие〉を求めて生きるのだと決めたアルカーヂイは、自分をそのような魂の回心に導いた衝撃の正体、すなわちマカールの「笑い」に思いを潜め、その結果を手記の最も適当な場所に、すなわちマカールの「笑い」が自分に「効いた」ことを告白した直後に置いたのである。

アルカーヂイが〈благообразие〉という言葉を「うわ言」のように用いた背景にこのような事情があるとすれば、彼が求めることになる〈благообразие〉とは、メレジュコフスキイが望んだように単純に「キリスト教的」と呼べるものではない。ましてアルカーヂイの実父ヴェルシーロフが曲解したように、かつて貴族社会に存在した「形式」や特権的な〈comme il faut〉と同列に論ずべきものでもない。手記を書き終えたアルカーヂイがこの先〈благообразие〉を自分のものとするためにどのような人生を辿るのか、小説の中では明らかにされていない。「ロスチャイルドのような金持ちになる」という理念の実現に着手するのかどうか不明である。だが、手記の最後に彼はこう書いている。

(…) この手記を終え、最後の一行を書き終えたところで、思い出したり書き留めたりというその作業そのものによって、僕は自分を再教育したのだということを不意に感じた。(…) <XIII-448>

手記の執筆そのものが自分の再教育であったと気付いたというならば、あるいはアルカーヂイはその手記の終わりをもって、「誠実」で「無邪気」な「笑

い」を笑うことのできる心の「快活さ」、〈благообразие〉を求めるとの、自己の再教育の始まり、自己を良い方に開発し、悪い本能——例の「蜘蛛の魂」も含めて——に打ち克つための再教育の始まりに代えようとしているのではないだろうか。「知的発達」などではなく自らの全性格の「最も高く、最も幸福な発達」を目指した新たな人生の始まりに、彼はこの手記を置こうとしているのではないか。そうだとすれば、アルカーヂイがこれから歩もうとしている人生は、たとえ「打ち解けた」笑い方ができて「本性が下卑ている」人間の人生、いくら「高潔で高尚な」ことを言ってもそれらはすべて見せ掛けか借り物で、いずれ「若い日の迷いや熱中として惜し気もなく擲ってしま」い「有利なこと」に携わるような人間の人生とは対蹠的なものであるに違いない。「ロスチャイルドのような金持ちに」なって自由な孤独の中に閉じ籠もるという彼の「理念」もまた、手記の執筆という「再教育」の中で、そしてその「再教育」の継続である新しい人生の中で修正を施され、またこれからも修正され続けていくであろう。だがそれがどのような「修正」であるのか、この「二十歳の書き手」は明かしてくれないのである<sup>50</sup>。

## 註

- 1 『罪と罰』の構想時期については、ドストエフスキイが『ロシア報知』編集者カトコフに宛てて作品のスケッチを示した1865年9月、『未成年』の構想時期は創作ノートの執筆が開始された1874年2月からとした。この場合それぞれの作品に関係する、より早い時期の着想は考慮の外に置かれている。
- 2 『罪と罰』の創作ノートは、大きく草稿（черновой автограф）と準備資料（подготовительные материалы）とに分かれている。前者は相当の長さにわたって綴られたもので、見ようによっては完成稿の異文とも受け取れるものであるが、後者は様々なエピソードや場面についての断片的なスケッチや、ドストエフスキイ自身の心覚えのためのメモが記されており、全体として統一を成しているとは言い難い。ほぼ同時期に書かれた草稿と準備資料のセットは、それが書かれた時期によって大きく三つに分類されるが、時間的に最も古い1番目の草稿、続く2番目の草稿では、作品は主人公自身によって語られる形式を取っている。
- 3 ドストエフスキイからの引用は、すべてФ.М.Достоевский. Полное собрание

сочинений в 30-ти тт.; Т.7, Из-во «НАУКА»,Л.,1973; Т.13, 1975; Т.16, 1976; Т.17, 1976; Т.22, 1981; Т.24, 1982. によるものとし、煩雑を避けるために本文中の〈 〉内に巻数をローマ数字、頁数を算用数字で示した。

4 引用した箇所は、原文では次のようになっている。

(…) Рассказ от имени автора, как бы невидимого, но всеведущего существа, но не оставляя его ни на минуту, даже с словами: «и до того все это нечаянно сделалось». (…)

この断片だけを取り出してみた場合、下線を施した人称代名詞の〈ego〉は〈автор〉(作者)を指すと見るのが至当であろう。しかしながら、ドストエフスキはこの準備資料(3)の多くの部分で、主人公の事を「彼」(он)と呼び続けている。ここでは「〈рассказ〉(物語)が〈автор〉(作者)から一分たりとも離れない」と解釈するよりも、主人公から離れないという意味に取る方が妥当であると判断した。

5 この時期ドストエフスキはエムスに滞在していたため、日付はヨーロッパで一般的であったグレゴリウス暦と、ロシアで使用されていたユリウス暦の両方を用いて示される。括弧内がグレゴリウス暦に従ったもの、すなわちヨーロッパの日付である。

6 創作ノートの中で、ドストエフスキは言葉を強調するために1) イタリック体を用いる2) 大文字を用いる、の二つの方法を用いているが、本稿の引用ではイタリックで強調された語には圏点を付し、大文字で書かれた言葉はゴチックで示した。

7 「ブルシーロフについてもこの方が良くらいだ」の部分は後からの書入れ。なお、ブルシーロフとは、完成稿におけるヴェルシーロフを指す。

8 先に引用の「私は文体抜きで書く」を想起されたい。同様の趣旨の言葉は、完成稿の冒頭に残されている

(…) 僕は出来る限り無関係なことを避けて出来事だけを書いていくが、大事なことは文飾を避けるということだ。文士などというものは30年も書いていながら何のために自分がそれだけの年月書いてきたのか結局分かっていないのだ。(…)。〈XIII-5〉。

9 ここでは未成年アルカーゲイの実父ヴェルシーロフを指す。

10 実際には、このような意味と正反対の「無分別な、醜い、不快な」等の意味も持っているが、これらは方言である。

11 コンサイス露和辞典第5版、井桁貞義編、三省堂、2005。

- 12 研究社露和辞典、東郷正延他編、研究社、1988。
- 13 *Большой академический словарь русского языка*, Т.2, «НАУКА», М.-СПб.2005.
- 14 *Толковый словарь русского языка*, под редакцией Д.Н.Ушакова, Т.1, Государственное издательство иностранных и национальных словарей, М., 1935.
- 15 В.Даль. *Толковый словарь живого русского языка*, Т.1, Государственное издательство иностранных и национальных словарей, М., 1956. なお、この辞典の最初の刊行は1863年から1866年にかけてのことだから、ドストエフスキイが『未成年』を執筆した頃に<благообразие>という語が持っていた意味をほぼ正確に記述していると思われるが、使用したのが1956年の版であるためにその後の改訂作業の中で<благообразие>の項について書き換えがなされている可能性が無いとは言えない。初版にあたることはできなかったが、インターネットで公開されている、1880年から1882年刊行の第2版を基にした「Толковый словарь В.Даля ON-LINE」(<http://vidahl.ru/>)では、1956年版と記述が同様であることを付記しておく。
- 16 *Словарь языка Достоевского. Лексический строй идиолекта*. Выпуск второй, «АЗБУКОВНИК», М., 2003. С.39-40.
- 17 私見では、タイプは『未成年』における<благообразие>の使用例を一件見落としている。煩雑ではあるが、本文中ではタイプの指摘に従った数字を記し、その後の括弧内に実際の数を示した。
- 18 『未成年』における1例については注20を参照されたい。ここでは『未成年』に最も執筆時期に近い『悪霊』における使用例を上記*Словарь языка Достоевского*から孫引きしておく。

[記述者(『悪霊』の語り手——松本注)がスタヴローギンについて] それは私が会ったことのある中で最も優美な紳士であった。極めて良い身なりをして、最も洗練された美しさ(утонченное благообразие)に慣れた人物のみがなし得るような形でおれを持っていた。*Словарь языка Достоевского*, С.39.

- 19 因みに日本における『未成年』の翻訳者も、この<благообразие>という語の訳し方には苦労をしたようで、「端麗」(米川正夫)、「善美」(工藤精一郎)などの例があり、タイプがいうところの「道徳的完成」という意味をも織り込んで入るようだが、いずれも19歳の青年が口にする言葉としてはややこなれが悪いとも言えよう。北垣信行は、基本的に<благообразие>を「上品さ」と捉え、文脈に応じて「品のよさ」と訳し分けている(講談社、世界文学全集44巻「ドストエフスキイ『未成年』」、講談社、1977年)。<благообразие>という語の特異性がテキストの中に埋没してしまう恐れはあるもののアルカーヂイの口の端に上る言葉としては、この方が遥かに通りが良いのではないかと思われる。

ユニークなところでは作家の直木三十五が本名の植村宗一名で、英語版の『未成年』を重訳した際(題名は『生意気盛り』)の訳、「らしさ」とか「らしくある

こと」であろう（ドストイェーフスキー全集第11巻『生意気盛り』、冬夏社、1921年）。

直木三十五がどのような英訳版で『未成年』を読んだのかは定かではないが、年代から考えて、1916年に発行されたC.ガーネットによる英訳本（F.Dostoevsky. *A Raw Youth. A novel in three parts. From the Russian by C.Garnett.* New York, 1916.）である可能性が高い。ガーネットは、『未成年』の中で14回使用される〈благообразие〉という語を、次の注20で言及される場合を含めた二例を除き、すべて〈seemliness〉（ふさわしさ、上品さ）と訳しており（筆者は1979年発行のFyodor Dostoevsky, *A Raw Youth, Translated from the Russian by Constance Garnett, HEINMANN, London, 1979.* を使用）、直木がこの語を上記のように訳したということは大いに考えられることである。2003年発行のPevearとVolokhonskyによる英訳本（Fyodor Dostoevsky, *The Adolescent, Translated from the Russian by Richard Pevear and Larissa Volokhonsky, Vintage classics, New York, 2003*）では、注釈20で触れるヴァーシンの台詞中の使用以外のすべての〈благообразие〉をやはり〈seemliness〉（ふさわしさ、上品さ）と訳している。〈благообразие〉という語の作品内における多義性を扱う本稿では、この語に一定の訳語を付けず、終始〈благообразие〉で通すことにする。

20『未成年』で〈благообразие〉という語が最初に用いられるのは、第1部第9章第2節でのことである。ロシア人は二流の民族であり、その使命はもっと高度な民族の材料となることであるという結論に達した青年クラフトのピストル自殺を知ったアルカーヂイが、共通の知人であるヴァーシンから、その自殺の詳細を聞き取ろうとする場面で、ヴァーシンの言葉として〈благообразие〉が用いられる。死の直前まで綴った手記の最後の方で、クラフトが「寒気がする」が、身体を温めるために一杯飲むのは「多分出血がひどくなるだろうから」やめたと記していることを重視するアルカーヂイに対して、ヴァーシンはこう言うのである。

（…）つまり、本当のところあなたは、寒気だの出血のことをおっしゃってるんですね？ところがこういう事実が知られているんです。つまり、自発的なものにせよそうでないにせよ、目前に迫った自分の死について考えることのできる人間のきわめて多くは、自分の死体の外見の美しさ（благообразие вида）について、実によく心配する傾向があるということです。その意味でクラフトも余計な出血を恐れたのですよ。（…）〈XIII-134〉

知人の自死に対するヴァーシンのこの余りにも冷淡な対応に、アルカーヂイは釈然としないものを感じるが、ヴァーシンが使った〈благообразие〉という語には特別な反応は示していない。ここでは〈благообразие〉という語は一般的な意味、すなわち外見的な美しさや体面という意味でのみ用いられていると考えてほ

は間違いはないだろう。それでもなお、『未成年』という小説の時空内に限って言えば、主人公アルカーヂイが<благообразне>という言葉に出会うのがまさにこの場面においてであるということの意義を過小に評価すべきではない。クラフトの自殺は、自らの出した論理的な帰結に従って死ぬことができるというその強い意志 (характер) によってアルカーヂイに「少なくとも敬意を表さなきゃいけない」<XIII-135>と言わしめるほどのものであった。自らも「ロスチャイルドになる」という「理念」を実現するための強い意志を必要としているアルカーヂイにとって、自分の死後の出血量まで気に掛けるクラフトの死に方は、自殺者が往々にして死後の自分の死体の美しさを心配する、という「事実」以上の意味合いを持ったのではないかとも思われる。

- 21 アルカーヂイの「理念」の内実についての詳細な分析、およびこの「理念」と小説の結構との関りについては、拙稿「「理念」からの逸脱——アルカーヂイ・ドルゴルーキ論」(『言語文化』、第3巻第2号、同志社大学言語文化学会、2000.12.)を参照されたい。
- 22 ドストエフスキイが『未成年』のための創作ノートの中で、小説全体のエスキースを作った際の表現である。
- 23 『未成年』の中で数度にわたって用いられる象徴的表現。情欲、特にアルカーヂイが、実父ヴェルシーロフの情熱の対象でもある、アフマーコヴァ公爵未亡人に抱く情欲を指している。
- 24 このこととの関連で興味深いのは、『未成年』の完成後、個人雑誌として再び『作家の日記』の執筆に取り掛かったドストエフスキイが、同誌に『大人しい女』を掲載したことである。1876年11月の『作家の日記』に掲載されたこの中篇小説には「空想的な物語」という副題が付されており、その「空想的」であるゆえんを、ドストエフスキイは前書きの中で説明している。自殺した妻の遺骸の傍らにいる主人公が、論理的にも感情的にも自家撞着を起こしながら自問自答したり、目に見えない聞き手に話し掛けたりする言葉を、速記者が残らず書き付けたならば、それはちょうどこの作品のような形式になるであろうと述べたあとで、ドストエフスキイはこう書いている。「一切を書き付けた速記者というこの仮定(書かれたものを後から私が手直しするのだが)こそが、私がこの物語において「空想的」と呼ぶものなのである。」(XXIV-6、傍点は松本)

この後ドストエフスキイは、このような形式の先駆としてヴィクトル・ユーゴーの『死囚囚最後の日』を挙げるのだが、ここで大事なのは、主人公の心の揺らぎもそのままに反映した物語を目的としながらも、ドストエフスキイはなお創作者による「手直し」の必要を認めているということである。このことを『未成年』に即して考えた場合に考えなければならないのは、「二十歳の書き手」アルカーヂイの手記が事実の歪曲や考え違いを含むとしても、それらは作者による「手直し」を経た歪曲や考え違いであり、従ってアルカーヂイによる事実の変改の可能

性は、そのような作者の企図が存在することを前提とする限りでのみ考慮される必要があるのではないかということである。

25 グリボエードフ（1795–1829）の戯曲『知恵の悲しみ』（1822–1824）の登場人物。

26 〈безбожник〉という語は単純に「無神論者」と訳すこともできる。だが、西欧的な言い回しである〈атеист〉（無神論者）を、マカールの口の端に上らせなかったことには、ドストエフスキの慮りがあったかも知れないので、ここでは「不信心者」と訳しておく。

27 ハンガリーのイコン研究者В.レパーヒンは『ドストエフスキの作品におけるイコン』（В.Лепяхин. *Икона в творчестве Достоевского*(«Братья Карамазовы», «Кроткая», «Бесы», «Подросток», «Идиот»), в кн. *Достоевский. Материалы и исследования*, Т.15, «Серебряный век», СПб., 2000, С.237-263.) という論考の中で、『未成年』で用いられる〈благообразие〉という語に考察を加えている。この〈благообразие〉とは、主人公アルカーヂイが自分を取り巻く周囲の人々には見出すことができず、生まれて初めて会った法律上の父親、巡礼のマカール・イヴァーノヴィッチに見出し、以後自らの生きる目的とする概念であるということ、不信心者（безбожник）、わけでも「口では神の名を唱える」「真の不信心者」ではなく、神を否定して偶像を崇める「落ち着きの無い不信心者」の特徴として、マカール自身がこの〈благообразие〉の欠如を挙げていることを述べた上で、「〈благообразие〉とは一体何であろうか」とレパーヒンは問いかけている。

イコン研究者らしく、レパーヒンはこの〈благообразие〉の説明を「人間が神の姿（образ）に従って作られた」ということから始めている。アダムによる墮罪以前、人間とは神の姿（образ）をした私であり、神のイコン（икона）であった（ロシア語のобразには、「聖像、イコン」の意味もある——松本注）。墮罪は人間の内なる神の姿（образ）を歪め、「元の姿」（первообраз）である神と人間の交流を不可能にしたばかりか、神の存在に対する不信まで生んでしまった。

人間による神（бог）の姿（образ）即ち〈богообразие〉の忘却は、即ち良き（благой）姿（образ）——〈благообразие〉の忘却でもある。〈благообразие〉を有する人間、即ち〈благообразный〉な人間とは、「善によって自らの内の悪に勝利した人間、神への信仰の喜び、神との交わりの喜びを獲得した人間」のことである。このような信仰や喜びは人間を「キリストである私」に変容（преобразить）させ、回復された神の姿は原初的な樂園の正常さを得ることになる。

パウロが言うところによれば神の子とは「見えざる神の姿（божий образ）」である。してみれば自らの内に神の姿を回復することはキリストの姿を回復することに等しい。そして「ドストエフスキにとって、キリストの教えは、福音書に示されたキリストの姿（образ）と分かち難いものであった。ドストエフスキにとって後者は前者よりも重要なものであったくらいである。」なぜなら「キリ

ストの姿を大事に護るという点に、ドストエフスキイは正教の主たる特性を見ていた」からである。

〈благообразие〉の対極にあるのは、神の姿の喪失、即ち〈безобразие〉（醜悪）であり、「醜悪な（безобразный）人間とは人間ではなく、姿を持たず、自身の内のその存在そのものを否定し、そうすることによって姿を醜い顔（образина）に変えている人間のことである。」マカール・イヴァーノヴィッチによれば、〈благообразие〉の特徴とは、信仰、軽々とした心、平静、魂の快活さであり、醜悪（безобразие）の特徴とは偶像崇拜、落ち着きの無さ、退屈、憂愁、苦痛である。そして「この苦痛は人間が自らの内で根絶し難いものを、永遠不朽の神の姿を根絶せんと欲しながらそれができないところから発している。」

この後レパーヒンは論考の対象を『カラマーゾフの兄弟』に移したり、ドストエフスキイが徒刑囚の言葉から拾い出した動詞〈образить〉——その語義をドストエフスキイ自身は形（образ）を与える、人間の中に人間の姿（образ человеческий）を回復させる、という意味だと説明している〈XXII-26〉——を『未成年』の創作ノートや1876年の『作家の日記』でも使用していることに着目し、教育（образование）とは本来「創造主がそれによって人間を作ったところの神の姿（божий образ）を人間の中に回復すること」だと議論を展開していく。

イコンの専門家であり、正教の神学にも通暁しているレパーヒンのこのような〈благообразие〉解釈は、恐らくは修正の余地も無いほどに正しいものであろう。ドストエフスキイが単にキリストの教えではなく、「キリストの顔（образ, лицо）」により強く惹かれていたことも、また、『未成年』に続く『カラマーゾフの兄弟』でも、ゾシマ長老が「顔」（лицо）の重要性に言及していることも、レパーヒンの説を補強するであろう。

しかしながら、〈благообразие〉という言葉、または概念についてのレパーヒンの解釈が正しいということは、彼の『未成年』解釈が正しいということとひとつではない。レパーヒンが行なっているのは、神学的思弁と小説内でのマカール老人の言葉との巧みな融合に過ぎず、なぜ他ならぬ『未成年』において〈благообразие〉という語が集中的に用いられているのか、そしてこの言葉がいかなる文脈で、誰によって用いられ、そのことによっていかに微妙な陰影を伴うのかは、この方法によっては明らかにできない。日常的なレベルにおいて外面的な美しさという意味で用いられている〈благообразие〉という語に、「善によって自らの内の悪に勝利した人間、神への信仰の喜び、神との交わりの喜びを獲得した」という「道徳的完成」の意味をドストエフスキイが込めようとしていたとしても、『未成年』において最初にこの言葉を口にするのが、正教の教理に明るいとは思われない19歳のアルカーヂイであることを考えれば、小説の文脈を離れた抽象的な思弁だけでは『未成年』におけるこの語の使用の実相は汲み尽くせないと見えよう。

- 28 ヴェルシーロフは、マカールについての人物評の中で「百姓ではなく家僕」であつて、そういう人々はかつて「主人たちの私生活、精神生活、知的生活にとても興味」を持っていたものだ、とした上でマカール自身は「ある種芸術家で自分の言葉を沢山持っているが、自分のでない言葉も使う」と言っている〈XIII-312〉。前日アルカーザイから聞いた〈благообразие〉という言葉、自分の談話の中にいと容易に滑り込ませる、というのは、マカール老人のむしろ本性であつたという見方も可能であろう。
- 29 本稿では次の版を使用。Д.С.Мережковский. *Л. Толстой и Достоевский*, «НАУКА», М., 2000.
- 30 Там же, С.385.
- 31 Там же, С.385.ゴチック部分は原文で大文字。
- 32 ここでヴェルシーロフが「上流階級」という言葉を口にする時、それが現実の貴族階級を指しているかどうかについては、小説の第2部第2章におけるヴェルシーロフとセリョージャ若公爵との会話に見られるヴェルシーロフの独特の貴族観をも考慮に入れなければならないが、本稿では立ち入らない。
- 33 К.В.Мочульский. *Достоевский——жизнь и творчество*, УМСА-PRESS, Париж, 1980, С.424.なお、本書の初版は1947年発行で、ここで使用したのは第2版である。
- 34 Там же, С.437-438.
- 35 Там же, С.439.ゴチック部分は原文で太字。なお、引用されたマカールの言葉の中略部分はモチュリスキイ自身によるもので、この引用の最後の一文「同じことです、死んだ後でも愛はあるのですから！」は全く別の台詞から持って来られたものである。
- 36 Там же, С.409.
- 37 ここでモチュリスキイが引用しているのは創作ノートではなく、二種類残っている手書き草稿のうちのひとつである。現在のドストエフスキ研究で多くの場合典拠とされているアカデミー版ドストエフスキイ30巻全集(Ф.М.Достоевский. *Полное собрание сочинений в 30-ти тт.*, Из-во «НАУКА», Л., 1972-1990.本稿でもこの全集を典拠としている)にはこの手書き草稿はそのままの形では収録されておらず、第17巻(刊行は1976年)において『未成年』のテクストの異同を示すという形で紹介されている。モチュリスキイは恐らくこの異文を1922年に『ナチャーロ』誌第2号でソヴェートの研究者コマローヴィチが公表したものか、1926年にミュンヘンで刊行されたドイツ語版の『知られざるドストエフスキイ』(*Der unbekannte Dostojewski*)から引用したのではないかと思われる。ただし、モチュリスキイの行なった引用は中略が多く、現在30巻全集で見ることのできるこの異文〈XVII-142〉との間には微妙な相違が認められるので、本稿ではモチュリスキイの引用をそのまま訳出しておいた。ゴチック部分は、モチュリスキイの行なった引用では太字になっているが、ドストエフスキイ

の手書き草稿の段階で強調されていた可能性がある。この異文が辿った経緯については、後に引用するフリードレンゲルの次の論考が詳しい。Г.М.Фридлендер. *Достоевский и Лев Толстой(К вопросу о некоторых общих чертах их идейно-творческого развития)*, в кн. *Достоевский и его время*, Издательство «НАУКА», Л., 1971, С.78.

38 К.В.Мочульский. *Достоевский—жизнь и творчество*, С.409.ゴチック部分は原文で太字。

39 『未成年』を執筆するに当たって、ドストエフスキイがトルストイを強く意識していたことは、ここに引いた異文によっても、また、完成稿においてニコライ・セミョーノヴィッチの言葉として、トルストイを暗示する言葉が残された<XIII-453~454>ことにも明らかであるが、その諸相については研究者によってもこれまでも様々な指摘がなされている。特に<благообразие>という言葉の使用に限って、『未成年』に対する『戦争と平和』の影響を考える上で、きわめて興味深い説を立てているのがЕ.И.セミョーノフである(Е.И.Семенов. *Роман Достоевского «Подросток»*, «НАУКА», Л., 1979)。彼はドストエフスキイによる<благообразие>という語の使用が、『戦争と平和』第4巻第1部第13章におけるプラトン・カラターエフの形象を説明する時のトルストイの用語に淵源を持っていると指摘し、更に『戦争と平和』におけるこの言葉にドストエフスキイの注意を向けさせたのが、Н.Н.ストラーホフが1870年に『ザリヤー』誌に連載した『ゲルツェンの文学活動』であったと述べている。

モスクヴァ放火犯としてナポレオン軍に囚われたピエール・バズーホフが収容されていたバラックで出会った農民出の兵隊プラトン・カラターエフは、彼の心に「もつとも強く貴重な思い出として、すべてのロシア的なもの、円やかなものの具現として」永遠に残った人物である(Л.Н.Толстой. *Полное собрание сочинений в 90-та тт*, Т.12, М.-Л., 1933, KRAUS REPRINT, Nendeln/Liechtenstein, 1972, С.48)。セミョーノフによれば、社会の改善によっては解決不可能な人間の個性と自然的本性の二律背反についてのゲルツェンの思想に対峙するものとして、ストラーホフが採り上げたのがこのプラトン・カラターエフなのである(セミョーノフ前掲書、94~95頁)。そしてその論拠としてストラーホフが『戦争と平和』の中から引いたのが次の一節であった。

(…) 彼(カラターエフのこと——松本注)は話すことを好んだし話すのが上手だった。彼のする物語の何よりの魅力は、ごく単純な、時にはピエールが気付かずに見過ごしたような出来事が、彼の話の中では莊重な<благообразие>の性格を帯びるといふ点にあった。彼は(…) お伽話を聞くのが好きだったが、何よりも好きだったのは現実の生活についての物語を聞くことだった。自分が聞かせてもらっている事柄の<благообразие>を明らかにしようとして言葉を

差し挟んだり質問をしたりしながら、そういった物語を聞いている時、彼は悦ばしげに微笑んでいた。(Л.Н.Толстой. *Полное собрание сочинений*, Т.12, С.50)

ゲルツェンの抱える二律背反にプラトン・カラターエフの形象が対置し得るものであるというストラホフの意見の当否はここでは問わない。しかしながら、長大な小説『戦争と平和』から〈благообразие〉という語を含むこの部分をストラホフが引用することによってドストエフスキの注意を引いたのではないかというセミョーノフのこの仮定には大いに説得力があるといえる。単に言葉の一致だけではなく、農民出身のカラターエフがピエールの精神に影響を与えるというモチーフは、家僕とはいえ農奴出身のマカール老人がアルカーヂイに新たな人生の指針を与えるという『未成年』のモチーフに似通っているからである。ただ、『戦争と平和』において〈благообразие〉という概念はそれ以上の発展を見せていない。

- 40 『未成年』に描かれた出来事が主として1874年9月から1875年の春に起きたものと仮定すると、ヴェルシーロフはトルストイと同じ1828年生まれということになる。
- 41 モチュリスキイが引用した、自らの「お気に入りの作家」についてヴェルシーロフがアルカーヂイに話しかける場面（完成稿では、やや変更を加えられて、先に引用したニコライ・セミョーノヴィッチの考察として用いられている）の前後の手書き草稿には、ヴェルシーロフのこの自覚を示す台詞がある。

(…) お前はつい最近〈благообразие〉を求めていると言明したっけね、うまい言い方をしたものだね [まるで心に沁みたようだった。いいかい、私自身もそれを求めているのだけれども、無かったもんだから、お前を呼ばなかったのだよ]。(…) <XVII-141>

(…) ねえアルカーヂイ、数日前、お前は急に熱くなってひとつの言葉を口にしただろう。あの言葉は私をひどく驚かせたよ。他にもないあの〈благообразие〉さ。私たちの中にそれが無いということも、お前が物心ついた日からそれを探し求めているのだということも、だからお前が私たちを捨てて別の場所にそれを探しに行くのだということも、私はちゃんと理解したよ。うん、それは全くその通りだ。だってお前に〈благообразие〉を与えられないと知っていたから、お前をこれまで呼ばなかったのだからね。(…) <XVII-142>

これらの言葉は、後述するように、ヴェルシーロフが〈благообразие〉という言葉を使うのは、アルカーヂイの影響によるものであることをも示していると言える。

- 42 Л.Н.Толстой. *Полное собрание сочинений в 90-та тт*, Т.2, М.-Л.,1935, KRAUS REPRINT, Nendeln/Liechtenstein,1972, С.172.
- 43 Там же, С.108.
- 44 Там же, С.215.
- 45 Там же, С.173.
- 46 Там же, С.173.
- 47 Там же, С.174.
- 48 Г.М.Фридлендер. *Достоевский и Лев Толстой(К вопросу о некоторых общих чертах их идейно – творческого развития)*, в кн. *Достоевский и его время*, Издательство «НАУКА»,Л., 1971, С.77.
- 49 Там же, С.78.
- 50 手記の最終章で、アルカーヂイは「理念」について謎めかしてこう書いている。

(・・・) これで終わりだ。もしかすると、読者の中には知りたがる人もあるかも知れない。お前のあの「理念」はどこへ行ったのだ、お前がそのように謎めかして宣言する、お前にとっての今始まったばかりの新しい人生とは、一体どのようなものなのだ、と。しかしその新しい人生こそが、僕の前に開いたこの新しい道こそが僕の「理念」なのだ。それは以前のものに他ならないけれども、しかしもう全く別の姿をしていて、だからもう知ることができないのだ。しかし僕の「手記」の中にそういったことをすべて書き入れることはできない。なぜならそれはもはや全く別のことだからだ。(・・・) <XIII-451>

## ПО ПОВОДУ СЛОВА «БЛАГООБРАЗИЕ» В РОМАНЕ Ф.М.ДОСТОЕВСКОГО «ПОДРОСТОК»

Кэнъити МАЦУМОТО

В этой статье будет рассмотрено значение слова «благообразие» и случаи его употребления в романе «Подросток».

Ф.М.Достоевский, в процессе работы над романом, долго

колебался между двумя вариантами изложения: вести рассказ от лица повествователя, который не принимает участия в действии романа, или от лица героя романа (будущего Аркадия Долгорукого), который записывает события, случившиеся с ним, только для себя.

В итоге Достоевский, рискуя разрушить литературную конструкцию нового романа, выбрал второй вариант, так как его «двадцатилетний писатель» без учета «литературных красот» пишет, «пренаивно» перескакивая «в такие анекдоты и подробности, по мере своего развития и неспелости».

Достоевский выбрал этот стиль изложения еще и потому, что увидел в нем залог оригинальности нового романа, благодаря чему надеялся избежать ошибок, навлекших на него неудачи с двумя последними романами, «Идиотом» и «Бесами».

Перед тем, как приступить к роману «Подросток», Достоевский установил себе правило, которое заключается «в том, что герой — Подросток. А остальное всё второстепенность, даже ОН(Версильов — К.М.)— второстепенность». Если принять это правило, то «благообразие», одно из ключевых понятий для понимания романа «Подросток», приобретает совсем новое и весьма простое истолкование.

На понятие «благообразие» в романе «Подросток» обращали внимание многие критики и исследователи, и нередко, связывая это понятие или с образом Версильова, или с образом странника Макара, давали ему отвлеченные, религиозные трактовки. Хотя эти трактовки сами по себе могут быть неоспаримы, они совсем неприменимы к ситуации, когда слово «благообразие» в первый раз в романе (исключая сцену диалога Аркадия с Васиным) звучит из уст Аркадия, девятнадцатилетнего подростка.

Следуя за событиями в романе, т.е. за событиями вокруг «героя», нельзя не признать, что понятие «благообразие» складывается именно у героя,

Аркадия, под впечатлением его первой встречи со своим законным отцом Макаром Долгоруким. И Макар, и Версилов, разумеется, употребляют слово «благообразие», но надо обратить внимание на то, что они оба заимствуют это слово у своего сына и толкуют по-своему. Макар пользуется понятием «благообразие» в своей проповеди о «суетливом человеке», который «бога отвергнет» и «идолу поклонится», а Версилов пользуется им в диалоге с Аркадием на тему русского дворянства, даже намекая на возможность смешения этого понятия с толстовским «*comme il faut*», привилегированной нормой дворянского поведения, изображенной Л.Н.Толстым в «Трилогии», особенно в «Юности». Но надо сказать, что такие варианты употребления слова «благообразие» у двух отцов, хоть и могут оказать влияние на Аркадия, по изначальному замыслу писателя, являются «второстепенными».

Как уже говорилось, Аркадий в первый раз употребляет слово «благообразие» при первой встрече с Макаром, чтобы выразить «потрясающее впечатление», которое произвел на него законный отец. Учитывая то, что слово «благообразие» вообще выражает внешнюю красоту и приятность, есть основания сказать, что Аркадий тут употребляет это слово под влиянием «смеха» Макара, который на него «всего более... подействовал». Эту гипотезу подкрепляет и то обстоятельство, что Аркадий «с умыслом, даже жертвуя течением рассказа» помещает «длинную тираду о смехе» прямо после описания смеха Макара.

On the Concept of <благообразие> in Dostoevsky's "The Adolescent"

Ken'ichi MATSUMOTO

**Keywords:** Dostoevsky, Adolescent, Seemliness